

354
465



始



萬葉集卷第一 正誤表

頁	行	誤	正
元	八	船泊	船舶
四〇	一〇	思はしむ	思はしむる
五	七	當麻真人磨	當麻真人磨
五	一	當麻呂大夫	當麻呂大夫
五	四	變りの	變りを
五	四	袖の	袖を
六	六	「ウヌメ」	「ウネメ」
六	一	でき得れば	できれば
七	九	舍人	舍人
八	六	でき得れば	できれば
八	二〇	埴にて衣を	埴を衣に
八	三	中山は	中山は
八	三	故郷	故郷
九	六	齊宮	齊宮
九	四	云ふ、趣	云ふ趣
三	六	將に厩大	方に厩大
三	六	附合	符合
四	三	適確	的確

「手記」

萬葉集卷第一

正誤表

古今書院發行

特230
601

高田浪吉著

萬葉集鑑賞

卷第二

東京古今書院發行



萬葉集卷第二

相聞

難波高津宮御宇天皇代	一
磐姫皇后天皇を思ひて御作歌四首	一
或本の歌一首	四
古事記の歌一首	五
近江大津宮御宇天皇代	八
天皇鏡王女に賜へる御歌一首	八
鏡王女和へ奉れる歌一首	九
内大臣藤原卿鏡王女を嫂ひし時鏡王女内大臣に贈れる歌一	九

首	10
九四	内大臣鏡王女に報へ贈れる歌一首	11
九五	内大臣 采女安見兒を娶たる時作れる歌一首	12
九六一一〇〇	久米禪師 石川郎女を嫂ひし時の歌五首	13
一〇一	大伴宿禰 巨勢郎女を嫂ひし時の歌一首	17
一〇二	巨勢郎女報へ贈れる歌一首	17
明日香清御原宮御宇天皇代	18
一〇三	天皇藤原夫人に賜へる御歌一首	18
一〇四	藤原夫人和へ奉れる歌一首	19
藤原宮御宇天皇代	20
一〇五一一〇六	大津皇子竊に伊勢神宮に下りて還り上ります時大伯皇女の御歌二首	20

一〇七	大津皇子石川郎女に贈れる御歌一首	23
一〇八	石川郎女和へ奉れる歌一首	23
一〇九	大津皇子竊に石川女郎に婚ひし時 津守連通其の事を占ひ露はしつ 皇子の御作歌一首	23
一一〇	日並皇子尊 石川女郎に賜へる御歌一首 女郎、名を大名兒と曰ふ	24
一一一	吉野宮に幸せる時弓削皇子額田王に贈れる歌一首	25
一一二	額田王和へ奉れる歌一首	26
一一三	吉野より蘿生せる松が柯を折り取りて遣しし時額田王の奉入れる歌一首	26
一一四	但馬皇女 高市皇子の宮に在せる時穗積皇子を思ひて御作歌一首	27
一一五	穗積皇子に勅して近江の志賀の山寺に遣しし時但馬皇女の御一首	27

作歌一首……………二六

一一六 但馬皇女 高市皇子の宮に在せる時竊に穗積皇子に接ひき事
既にあらはれて後 御作歌一首……………二九

一一七 舍人皇子の御歌一首……………三〇

一一八 舍人娘子和へ奉れる歌一首……………三一

一一九―一二二 弓削皇子紀皇女を思ふ御歌四首……………三二

一二三―一二五 三方沙彌 園臣生羽の女に娶ひて未だ幾時いくたも經ず病に臥し作
れる歌三首……………三五

一二六 石川女郎 大伴宿禰田主に贈れる歌一首……………三七

一二七 大伴宿禰田主報へ贈れる歌一首……………三九

一二八 石川女郎更に大伴宿禰田主に贈れる歌一首……………四〇

一二九 大津皇子の宮の侍石川女郎大伴宿禰宿奈鷹おほとものすくなまろに贈れる歌一首……………四一

一三〇 長皇子、皇弟に與ふる御歌一首……………四一

一三一―一三七 柿本朝臣人鷹 石見國いはみのくにより妻に別れて上り來る時の歌二首并
に短歌……………四二

一三八―一三九 或本の歌一首并に短歌……………五〇

一四〇 柿本朝臣人鷹の妻依羅娘子人鷹よさみのいらつめと相別るる歌一首……………五二

挽歌

後岡本宮御宇天皇代……………五三

一四一―一四二 有間皇子自ら傷みて松が枝を結べる歌二首……………五三

一四三—一四四	長忌寸意吉麻呂結松を見て哀咽せる歌二首	五
一四五	山上臣憶良追和せる歌一首	五
一四六	大寶元年辛丑紀伊國に幸せる時結松を見る歌一首	五
近江大津宮御宇天皇代	近江大津宮御宇天皇代	五
一四七	天皇聖躬不豫の時太后の奉れる御歌一首	五
一四八	一書の歌一首	五
一四九	天皇崩じ給ひし後太后の御作歌一首	六
一五〇	天皇崩じ給ひし時婦人の作れる歌一首 未だ姓氏を詳にせず	六
一五一—一五二	天皇の大殯の時の歌二首	六
一五三	太后の御歌一首	六
一五四	石川夫人の歌一首	六
一五五	山科御陵より退り散りし時額田王の作れる歌一首	六

明日香清御原宮御宇天皇代	明日香清御原宮御宇天皇代	六
一五六—一五八	十市皇女薨じ給ひし時高市皇子尊の御作歌三首	六
一五九	天皇崩じ給ひし時太后の御作歌一首	六
一六〇—一六一	一書の歌二首	七
一六二	天皇崩じ給ひし後八年九月九日御齋會を奉爲にせし夜夢の裏に習ひ賜へる御歌一首	七
藤原宮御宇天皇代	藤原宮御宇天皇代	七
一六三—一六四	大津皇子薨じ給ひし後大來皇女伊勢の齋宮より京に還りし時御作歌二首	七
一六五—一六六	大津皇子の屍を葛城の二上山に移し葬りし時大來皇女哀傷して御作歌二首	七
一六七—一六九	日並皇子尊の殯宮の時柿本朝臣人麿の作れる歌一首并に	七

短歌……………七六

一七〇 或本の歌一首……………八二

一七一―一九三 皇子尊の舍人等慟傷して作れる歌二十三首……………八三

一九四―一九五 柿本朝臣人麿泊瀬部皇女忍部皇子に獻れる歌一首并に短歌……………九九

一九六―一九八 明日香皇女の木施の殯宮の時、柿本朝臣人麿の作れる歌一首

并に短歌……………一〇四

一九九―二〇一 高市皇子尊の城上の殯宮の時、柿本朝臣人麿の作れる歌一首

并に短歌……………一〇九

二〇二 或本の歌一首……………一一五

二〇三 但馬皇女薨じ給ひし後穗積皇子冬の日雪落るに遙に御墓を望

み悲傷流涕して御作歌一首……………一二六

二〇四―二〇六 弓削皇子薨じ給ひし時置始東人の作れる歌一首并に短歌……………一二七

二〇七―二二二 柿本朝臣人麿妻死せし後泣血哀慟して作れる歌二首并に短歌……………一二〇

二一三―二二六 或本の歌一首并に短歌……………一二六

二一七―二一九 吉備津采女死せし時柿本朝臣人麿の作れる歌一首并に短歌……………一三一

二二〇―二二二 讚岐狹岑島に石中の死人を視て柿本朝臣人麿の作れる歌一首

并に短歌……………一三五

二二三 柿本朝臣人麿石見國に在りて死に臨みし時自ら傷みて作れる

歌一首……………一三九

二二四―二二五 柿本朝臣人麿死せし時妻依羅娘子の作れる歌二首……………一四〇

二二六 丹比真人名闕く 柿本朝臣人麿の意に擬へて報ふる歌一首……………一四二

二二七 或本の歌一首……………一四三

寧樂宮

二二八―二二九 和銅四年歲次辛亥河邊の宮人姫島の松原に孃子の屍を見て

悲嘆して作れる歌二首……………一四四

二三〇―二三二 靈龜元年乙卯秋九月志貴親王薨じ給ひし時の歌一首……………一四五

二三三―二三四 或本の歌二首……………一四八

目次 をはり

相聞

難波高津宮御宇天皇代 大鸕鷀天皇(仁徳天皇)

磐姫皇后、天皇を思ひて御作歌四首

八五 君が行日長くなりぬ山尋ね迎へか行かむ待ちにか待たむ

右の一首の歌は、山上憶良の臣の類聚歌林に載す。

この歌は、(九〇)の、「君が行日長くなりぬ山たづの迎へを行かむ待つには待たじ」と同じ解釋が成立つのであるが、幾分句法が異つてゐるので詞を吟味してみよう。「君が行」は天皇の行幸を言うてゐるのである。「日長く」は來經長であつて月日の經て長いことである。「山尋ね」は山路をたづね歩き行くと云ふのである。四五句は、天皇をお迎へに行くべきか、それともお

歸りをお待ち申さうかと云ふ意である。磐姫いはのひめと天皇(仁徳)の御歌は書紀に多く記載されてゐるので、(九〇)の歌の端書の輕かろの太郎女おやいらつめの御歌とする説もあるが、磐姫皇后の御歌としても毫も不自然ではないのである。参考の爲に諸説を挙げておく。眞淵曰く、「そは古事記にある輕、大郎女の御歌を此皇后の御歌と誤、其言どもも誤りて類聚歌林るるじゆかりんに載たるを、後人みだりにここに注せし物也、」云々。橋守部は、(八五)(八六)(八七)(八八)の四首は、衣通皇女そとほりのすめみこ(輕の大郎女)の御歌であると断定してゐる。そこで題詞のみ残つて磐姫皇后の御歌は「落失」とするのである。日本書紀所載の磐姫皇后の御歌は、詞の斷續に細かさがある。それに比してこの御歌には調子の抑揚に伸びやかさがあつて、纏りを感じるであらう。磐姫皇后の御歌を左に一首引用してみよう。「夏虫なつむしの火蟲ひむしの衣ころも二重ふたへきてかくみやたりは豈あによくもあらず」天皇(仁徳)の御詠みなされた歌に對して御答へ奉つた御歌である。

八六 斯かくばかり戀こひつつあらずは高山たかやまの磐根いはねし枕まくらきて死しなましもの

を

二句、「戀ひつつあらずは」と訓むべきで「ば」と濁音で訓む可きではない。戀ひつつあらんよりは、或ひは、戀ひつつあらば、と云ふ解釋になるのであるが、眞淵曰く、「こひにこへども、かくのみ思ふごとくあらずあらんものと知なばてふことを、約つづめていふ言也云々」。高山の磐根を枕にして死にたいものを、と云ふ歎きには、絶對にもものを感じようとする哀れさがある。

八七 在ありつつも君きみをば待またむうち靡なびく吾わが黒髮くろかみに霜しもの置おくまでに

「在りつつも」はこの世に存たがへゐて君をば待たむと云ふのである。自分の髪に白髪が生ふるまで、と云ふ意である。

八八 秋の田の穂の上に霧らふ朝霞いづへの方に我が戀やまむ

稻の穂の上に朝霞が立つてゐるのである。「霧らふ」と云ふ詞には日光がきらきら射してゐることが想像されるのであるが、これはどうか。ここはやはり霞が深くこめてゐる感じ、その霞は消失せるものである、その如くに自分の戀しい情はいつ止む可きかと云ふ心持である。相聞歌もここまでに至れば結構である。

或本の歌に曰く

八九 居明して君をば待たむぬばたまの吾が黒髪に霜は降るとも

右の一首、古歌集中に出づ。

「居明而」を、「居明而」と云ふ訓み方もあつたやうであるが、ここは、「キアカシテ」とならなくてはならぬ所である。一夜寝ずに明かして、外にイむ自分の黒髪に霜は降り置くと、君をば待つてゐよう、と云ふのである。

古事記に曰く、輕太子、輕の太郎女に奸けぬ。故その太子は

伊豫の湯に流されき。この時衣通王、戀慕に堪へずして追

ひ往く時の歌に曰く、

九〇 君が行日長くなりぬ山たづの迎へを行かむ待つには待たじ

ここに山多豆といへるは、これ今の造木といふ者なり。

右の一首の歌は、古事記と類聚歌林と説く所同じからず。歌の主亦異なり。

因りて日本紀を検するに曰く、難波高津宮御宇大鷦鷯天皇二十二年春正

月、天皇皇后に語りまして、八田皇女を納れて妃となさむとす。時に皇后

聽しませず。ここに天皇歌もて皇后に乞ひたまふ云々。三十年秋九月乙卯朔乙丑、皇后紀伊國に遊行して熊野岬に到り、其の處の御綱葉を取りて還りたまふ。ここに天皇、皇后の在さざるを伺ひて、八田皇女を娶りて宮中に納れたまふ。時に皇后難波の濟に到りて、天皇、八田皇女を合しつと聞きて、大く恨みたまふ云々。また曰く遠飛鳥宮御宇雄朝孀稚子宿禰天皇二十三年春正月甲午朔庚子、木梨輕皇子、太子と爲る。容姿佳麗にして見る者自ら愛づ。同母妹輕太娘皇女、また艶妙なり云々。遂に竊に通じぬ。乃ち悒懷少しく息む。二十四年夏六月、御羹の汁凝りて氷と作れり。天皇異みてその故を卜はす。卜ふ者曰く、内の亂あり、けだし親親相奸くるかと云々。仍りて太娘皇女を伊與に移すといへり。今案するに二代二時この歌を見ざるなり。

この歌は、(八五)の歌と同じであつて、傳誦されてゆくうちに、一部分の詞のうへに變化が

生じた譯である。「山たづの」は枕詞であるが、「鑷」であつて、斧の大きいものである。つまり本草茂る山を道つけて歩む折に、本草の類を伐るに、刃を向うにして伐るそれを、「迎へ」とつづけたのである。結句は、待つには不堪、と云ふ意である。左註に、「ここに山多豆といへるは、これ今の造木といふ者なり」と記してあるが、それを、「ニハトコ」「接骨木」と云ふ説もある。「衣通王」は「衣通皇女」であつて、亦の名は「輕の太郎女」である。

左註の文章に註を入れておく。「天皇皇后に語りまして」の天皇は、大鷦鷯天皇、仁德天皇である。皇后は磐姫である。「御綱葉」は神事の儀式に添ふる柏のことである。本居宣長曰く、「この柏は、葉三またにてさき尖りたれば、三角の意の名なるべし」云々。「二代二時」と謂ふのは岸本由豆流曰く、「二代は、仁德天皇と允恭天皇との二御代をいふ。二時は、仁德天皇の八田皇女をめしたまへるを、皇后のうらみ給ひし事と、輕皇子の輕太娘皇女に通じ給ひし事とをいふ。不見此歌とは、まへに檢日本紀云々とある文をうけてかけるにて、右二代の二時に此君之行云々の歌、書紀には見えすといへる也。」雄朝孀稚子宿禰天皇は、允恭天皇。

近江大津宮御宇天皇代

天命開別天皇（天智天皇）

天皇鏡王女に賜へる御歌一首

九一 妹が家も繼て見ましを大和なる大島の嶺に家も在ましを

一に云ふ、妹があたり繼ぎて見むに、一に云ふ、家居らましを

鏡王女が、大和の國から、近江の都に上られ、近江の國の何處かに御住みなされた折の歌であると思像してもよいであらう。「ツギテミマシヲ」は、つづけ絶えず見んものを、と云ふ意味ではあるが、この歌では、「家」と云ふ詞が二箇所に使はれてゐる。つまり、妹と逢うたが、その家をもついでに見よう、妹の家は、大和の大島の嶺にあるときくものを、と云ふ意である。大島の嶺は大和國の平群郡にあるとして、そこに、妹である額田女王と、鏡王女は住まはれてをつたと云ふ説がある。又鏡王女は、額田王の誤りとする説もあるやうであるが、この説は多く否定されてゐる。鏡王女は藤原鎌足の妻であり、額田王の御姉である。天皇（天智）こ

の鏡王女に思ひをかけさせられてをつたのである。井上通泰氏は、鏡王女いまだ鎌足の妻とならざるうち、つまり、近江大津宮遷都以前の天皇皇太子に在しましころの御製とする説を立てられてゐるが、賛成できない。次ぎの鏡王女の和へ奉る歌にしても、この御製にしても、相當熟練を経た技法である事がうかがへる。

追記「大島の嶺に家も在らしを」と云ふのは、深い感慨の籠つた句法である。この大島の嶺を、大島の嶺に家が在ると論ずるのは歌のあはれを知らぬ者の言である。

鏡王女に和へ奉れる御歌一首

九二 秋山の樹の下がくり逝く水の吾こそ益さめ御念よりは

吾れに言ひ給ふに、大島の嶺に家も在ましを、と云ふ御心は、身に沁みてお慰び申されるが、さういふ御心があればこそわたくしの心はますます君をお慕ひ申す、と云ふのである。「御念よ

りは」と云ふのを、「大君の御心よりも」自分の心の方はなほ増してゐると解するのは、普通であらうが、ここは、御心を知つて戀ひ奉る自分の心がまさる、と云ふのである。秋山の下を流る水の増さるのに譬へて、三句まで「吾こそ益さめ」の序歌となつて表現されてゐるのである。

内大臣藤原卿鏡王女を嫂ひし時鏡王女内大臣に贈れる歌一首

九三 玉匣覆ふを安み明けて行かば君が名はあれど吾が名し惜しも

「明けて行かば」と云ふのは、夜が明けて行かば、と解されてゐるが、疑問の餘地が充分にあらう。しかし、ここで夜が明けて行かば、と解さなくてはこの歌の意味が面倒になる。「玉匣覆ふを安み」が明けるの序なのであるが、藤原卿の鏡王女を嫂ふ時、夜の更けていまだ歸らぬ鎌足卿を促がして、夜が明けたならば人目が多い、とく歸り給へ、君は世の人のよく知るところであるが、自らは女の身なるが故に、世の人にとやかく言はれ名を立てられるのが惜しい、

といふ意である。鎌足が鏡王女の許に通はれた時の歌とするのである。「玉匣」は「匣」のこと
で櫛や鏡等を入れる箱である。「覆ふを安み」は箱の蓋の開き覆ふそれを云つてゐるのである。
さて此歌が果して、一夜の情事を歌はれたのであらうか。「君が名はあれど吾が名し惜しも」
は、もつと複雑な背景があつて詠まれたのであらう。

内大臣藤原卿鏡王女に報へ贈れる歌一首

九四 玉くしげ將見圓山の狭名葛さ寝ずは遂に有りかつましじ

或本の歌に曰く、玉くしげ三室戸山の

「玉くしげ」は枕詞、「將見圓山」は、三室山、すなはち三輪山であると云ふ。「狭名葛」は、
橋守部の文章を引用しておく。「五味葛の事也。滑かなる汁の出る物なれば、眞滑葛の義なる
を約めて云ふ。字鏡五味、佐奈が豆良とあり」云々。「アリカツマシジ」は、「アリカテマシヲ」

「アリガテマシモ」等の訓がある。そこでこの歌の解であるが、一度も相寝すば堪へ得じ、と云ふ意である。

内大臣藤原卿采女安見兒を娶たる時作れる歌一首

九五 吾はもや安見兒得たり皆人の得がてにすとふ安見兒得たり

契沖曰く、「采女は、青衣を著、領巾、手櫛など掛て、帝の陪膳を宰る女官なり、延喜式に、古は青衣と書きて、うねめとよめる由見えたり、安見兒は名なり、」守部曰く、「此歌は、安見兒を皆人の得勝にせしと云ふにもあらず、又吾其采女を得たりと誇り給ふにもあらず」云々。つまり、「安見兒を領身となりたるはよ、と戯れ給ふなり。」と述べてゐる。赤彦曰く、「よきものを得て「僕はく」と呼んで躍りあがる子どもの心理に似てゐるのである」云々。

久米禪師、石川郎女を嫂ひし時の歌五首

九六 み薦茹る信濃の眞弓吾が引かばうま人さびて否と言はむかも

禪師

石川郎女を弓に喩へて、男が弓を引く如くに、郎女を我物にしようと手を執つて引いたならば、貴人ぶつてわが手さへ打拂つて否と云ふであらう、と云ふ意である。

久米禪師は僧ではなく俗人であると云ふ。當時の通人とでも云はうか。一二句の表現にそれを見るべきである。石川郎女は、集中三人同名人がゐるが、いづれも別人であると云ふ。この石川郎女は身分の低きものである。

九七 み薦茹る信濃の眞弓引かすして強ひざるわざを知ると言はな

そこで郎女が歌を返したのであるが、やはり弓に心を寄せてゐるところに、郎女の世事に長じてゐた事が窺へる。三句を、「弦著くるわざを」と、「強ひざるわざを」との訓み方があるが「強作留」を、契沖と眞淵は、「強」を「弦」の誤りとして、「弦作留」と改めてゐるのである。諸本多く「ヲハクル」に據つてゐるやうである。すでに郎女には禪師の胸中は知るところである。それで、自分を誘ふならば、もつと積極的になさりませと云ふ心持が含まれてゐるのである。しかしその強ひてのしわざをわたくしは知つてゐるのではない。と云ふので、「知ると言はなかに」は、言はないことだ、と言つてゐるもの、知つてゐることを豫想してゐる句法である。「弦著くる」となると、弓などの事にゆかりをつけて考へるやうになるのであるが、郎女的心は、もつと人情的に活動してゐる譯である。

九八 梓弓引かばまにまによらめども後の心を知りがてぬかも

「梓弓」は引くの枕詞であつて、あなたがわたくしを誘ひ引き寄せらるるならば、心のままにならうが、強ひたるわざに満足した後、果してあなたはどのやうなお心になるか、それが不安である、と云ふ意である。

九九 梓弓連弦とり著け引く人は後の心を知る人ぞ引く

久米禪師は飽くまで女を弓に譬へてゐるところが面白い。「引く人は」は禪師自身のことを云うてゐるのである。契沖曰く、「ツラヲは」、つるをなり、右の歌を受けて、男は弓を知るものなれば、初よりよからじと思ふには手も觸れず、よしと思ふをば愛して後まで引遂ぐる如く、

思ひ初めては、絶ゆる事あらじ、うたがひ思すなとなり、」云々。以上の解釋によれば、どこまでも弓になぞらへての應答であるかのやうであるが、作者はなかなか苦勞人で、熱情的に動かうとする郎女を窘めてゐるところがある。

一〇〇 東人の荷前の箱の荷の緒にも妹が心に乗りにけるかも

禪師

東國から年の初めに奉る調物を荷前と云ふのであつて、その荷前の箱をひき結ぶ緒の如くに妹が情に心を引き込まれた、と云ふ意である。

大伴宿禰、巨勢郎女を娉ひし時の歌一首

一〇一 玉葛實ならぬ樹にはちはやぶる神ぞ着くとふ成らぬ樹ごとに

女が年老くるまで男を持たねば、神に依られてつひに男を得ぬものであると云ふのが、この歌の解釋なのである。「實ならぬ樹」は郎女に譬へてゐるのである。仙覺曰く、「タマカツラトイフハ、葛ノナカニ、花ノミサキテ、ミナラヌ、カツラノアルヲ云也。オホクハ、カミノヤシロナトニソヨミタルトイヘリ。」云々。「ちはやぶる」は神の枕詞である。

巨勢郎女報へ贈れる歌一首

一〇二 玉かづら花のみ咲きて成らざるは誰が戀ならめ吾は戀ひ念ふを

玉かづらが花のみ咲いて實の成らぬ木と言はるるが、それは一體誰が上のことを申してをら

れるのであらう。わたくしはかく獨り心を苦しめてゐるものを、と云ふ意である。「誰が戀ならめ」と云ふ反問するやうな言ひ方が、いかにも女性らしくていい。

明日香清御原宮御宇天皇代 あすかのきよみはらのみや 天淳中原瀛真人天皇(天武天皇)

天皇藤原夫人に賜へる御歌一首

一〇三 わが里に大雪降り大原の古りにし里に降らまくは後

天皇(天武)が飛鳥清御原宮に坐しましてのたまはれた御歌である。「わが里」は飛鳥清御原宮のほとりを言はれてゐるのである。「大原の里」は藤原夫人の居給ふ地である。いまわが里には大雪が降つて、甚だ珍らしく思うてゐるが、この大雪が、大原の里に降るのは後であらう、と云ふ意である。都から大原の里に下つて住まはれてをる藤原の夫人にいささか戯れの御心あつての歌とするのである。

藤原夫人は鎌足の女である。

明日香清御原宮。大和國高市郡上居村。

大原の里。大和國高市郡。今の飛鳥村小原の地。藤原鎌足の本居。

藤原夫人和へ奉れる歌一首

一〇四 わが岡の龍神に言ひて降らしめし雪の摧し其處に散りけむ

「古りにし里」と申されたのに對して、夫人は、「わが岡の龍神」と言はれてゐるのである。龍神は龍神のことである。大雪が降つたとのたまはれるが、その雪は、わたくしが山の龍神に乞ひて、降らしめた雪の一部分が、そちらに降つたに過ぎぬと言はれてゐるのである。「雪の摧し其處に散りけむ」は細かな云ひ方であるが、ものを内に包んだ表現である。「クダケ」は、「ク

ダケシガ」と云ふ意である。もののくだける意。

藤原宮御宇高天原廣野姫天皇代（持統天皇）

大津皇子竊に伊勢神宮に下りて上り來ませる時、大泊皇女の御

作歌二首

一〇五 わが背子を大和へ遣るとさ夜更けて曉露に吾が立ち霑れし

大津皇子は天武天皇の皇子である。大泊皇女は御姉君である。「わが背子」は、大泊皇女が、弟君を親しみ給ふ稱呼である。大和から竊に伊勢國に下られた皇子の、再び大和へお立ちなされる時に詠まれた御歌なのである。此事情は天皇の御病の時と稱せられてゐるが、伊勢に下られて間もなく皇子は誅せられた。時、朱鳥元年十月二日御年二十四。天武天皇崩御の後である。夜更けて曉に至るまで、草むらの露に濡れてイむ皇女の御姿が偲ばれる。

藤原宮。大和國高市郡、持統、文武兩朝の皇居。鴨公村高殿醍醐の地とする説。

一〇六 二人行けど行き過ぎがたき秋山をいかにか君がひとり越えなむ

二人つれ立ちて越ゆるにも秋の山路はもの寂しく堪へがたくあるに、君はひとりその山路を越えて大和へ歸られる、と云ふ意である。「二人行けど」と現在その山路を越えつつあるが如き感動は、黄葉の散り敷いて、氣落莫とした山路を想像してゐる表現である。大泊皇女の御心には、弟君がこの度の天下の大事をいかにして御成就あそばされるか、その御懸念と別離の情の深きものを覺えられたのである。

大津皇子、石川郎女に贈れる御歌一首

一〇七 あしひきの山の雫に妹待つと吾立ち沾れぬ山の雫に

ここの、石川郎女は、久米禪師と贈答した石川郎女とは別人であると云ふ。妹が慕はしく、山路に妹の来るを待つてゐる時、草木の露が身にかかつて衣が濡れたと云ふのである。「山の雫に」と云ふおほまかな言ひ方が面白い。

石川郎女、和へ奉れる歌一首

一〇八 吾を待つと君が沾れけむあしひきの山の雫にならましものを

君が、わたくしを待つてゐる爲に、草木の露の雫に濡れたと言はれるが、わたくしはまこと

にその雫にでもなつてゐたいものを、と云ふ意である。「山の雫にならましものを」の詞のやはらかみに注意すべきであらう。

大津皇子、竊に石川郎女に婚ひし時、津守連通其事を占ひ露はしつ。皇子の御作歌一首

一〇九 大船の津守の占に告げむとは正しに知りて我が二人宿し

「大船の」は津守と云ふための枕詞である。津守連が、大津皇子と、石川郎女との御關係を卜筮によつて云ひ露したが、それは恐らく自らの豫期してゐた事である。正に二人は相寢たと云ふ意である。「ノラムトハ」は、舊訓に「ツゲムトハ」となつてをるが、この問題について、山田孝雄氏曰く、「のる」は特定の對者に對する性質の語にあらずして、神又は君などの御心の發表をいふに止まり、若し對者ありとせば、一般世人を對者とすといふべし。問ひに對して

は「つぐ」といふべきものなり。」云々。岸本由豆流曰く、「君とわれと通じをる事を、津守の通がうらなひあらはして、告んとは、かへりてこの方は、正しくしりてありながらも、戀にえたへがたくて、かく二人宿しぞと也。」と解してゐる。

日並皇子尊石川女郎に贈り給へる御歌一首（女郎字を大名兒といふ）
一一〇 大名兒を彼方野邊に尅る草の東の間も吾忘れめや

東の間も大名兒をわれは忘れられぬと云ふ意である。「彼方野邊に尅る草の」は「東」と云ふ爲の序詞である。「ツカノアヒダ」は暫しの間、と云ふのである。この石川女郎は、大津皇子との贈答歌、（一〇八）の作者であるとする説がある。

吉野宮に幸せる時、弓削皇子額田王に贈り與ふる歌一首

一一一 古に戀ふる鳥かも弓弦葉の御井の上より鳴きわたり行く

「古に戀ふる鳥」は霍公鳥のことである。これは次ぎの歌によつて想像するのであるが、「弓弦葉は「讓葉」である。言海に「新葉生ヒテ後ニ落ツ、相讓ルニ似タリ、因テ、新年ノ儀ニ此葉ヲ用キテ、父子相讓ル義ニ寄セテ祝ス」云々と記してゐる。つまり讓葉の掩ふ御井をほととぎすが鳴きわたつた、と云ふ意である。古の世をお偲びになつて、ほととぎすを、戀ふる鳥かも、と表現されたのである。この「古に戀ふる鳥かも」は、額田王の御環境などを深く御承知あつて詠まれたところがある。弓削皇子は、天武天皇の皇子である。額田王は、天武天皇と御淺からぬ御關係があり、かつて吉野宮に在しましし事があつた。端書の、「吉野宮に幸せる時」は、持統天皇の御幸である。「御井」は云ふまでもなく吉野宮の附近である。

額田王和へ奉れる歌一首

一二古に戀ふらむ鳥は霍公鳥けだしや鳴きし吾が念へる如

弓削皇子が、霍公鳥と申さずに、「戀ふる鳥かも」と云はれたのに對して、「古に戀ふらむ鳥は霍公鳥」と應酬されてゐるところが面白い。「ケダシヤ」は「もしや」の意である。仙覺曰く、「ケタシトイフコトハ、サハヤカニトイフコトハ也。」云々。参考の爲に記しておく。この歌、左の如くにも解されるであらう。古に戀ふる鳥はほととぎすである、なるほどわたくしの思つてゐた如くにほととぎすは鳴いた、と云ふのである。四五句の詞の運用はなかなか老巧である。お若い弓削皇子の御心に立入られてゐる風が見える。

吉野より蘿生せる松が柯を折り取りて遣しし時額田王の奉入
れる歌一首

一二三み吉野の玉松が枝は愛しきかも君が御言を持ちて通はく

吉野の松が枝は、弓削皇子の御心を持つて通ひ來つた、と云ふのであつて、つまり松の枝に皇子の御心が籠められてゐる、それを「愛しきかも」と言うてゐるのである。松の枝が君の御言を承け持つて通つてきた、とも解されるのである。山田孝雄氏曰く、「カヨハク」の「ク」は「事」の意の古言なるべく、「通ハク」はここには「通ふことよ」といふほどの意なるべし。」云々。端書について契沖曰く、「此端作の詞、上を承る故に、弓削皇子と云はざれども、奉入と云は、意顯はれたり。」云々。「上を承る故に」は、(一一一)の「吉野宮に幸せる時弓削皇子、額田王に贈り與ふる」云々の端書の事である。

但馬皇女高市皇子の宮に在せる時穗積皇子を思ふ御歌一首

一二四秋の田の穂向のよれる片縁りに君によりな言痛かりとも

「穂向のよれる片縁りに」は、實つた穂の重々と垂れて片よりになびくそれを言うてゐるのである。その如くに君の御心にわが心を寄せよう、世間の人々が何んと言ふとも、と云ふ意である。「なな」と云ふ詞は、いかにも柔らかみのある、そして動かし難い意志表示とでも、言はうか。題詞の高市皇子の宮に在せる時、と云ふのはこの皇子一度皇太子に立ち給はれた、それを讀者は先づ念中に置いて味ふべきである。但馬皇女、高市皇子、穗積皇子の御三方は、天武天皇の御子であつて、異母兄弟にまします。

穂積皇子に勅して近江の志賀の山寺に遣しし時、但馬皇女の御
作歌一首

一一五 後れるて戀ひつつあらずは追ひ及かむ道の隈回到標結へわが
背

「後れてゐて」は京におくれゐてと云ふ意味なのであるが、熱情の深くこめられて、居ても立つてもゐられぬ心である。かう云ふ心で過ぎてゆく、かうして居るよりは早く近江まで君の御跡をしたひ追ひゆかう、さればその道の隈々に標を結うておかせ給へ、と云うて、「標結へわが背」と、あたかも皇女の御聲が聞えるやうである。「志賀山寺」は、近江國志賀郡に在つた、崇福寺である。いまの南滋賀郡である。

但馬皇女、高市皇子の宮に在せる時、竊に穂積皇子に接ひき。事
既にあらはれて御作歌一首

一一六 人言をしげみ言痛みおのが世にいまだ渡らぬ朝川渡る

「竊に穂積皇子に接ひき」と云ふ、これはこの歌を鑑賞する上に充分効果がある。「おのが世

に」は、自己の生涯を含めた言ひ方であつて、苦みをおのづから客観的に表白されてゐるのである。四五句は、男女の道、それを「朝川」に譬へたとする見解も面白いのである。世間の人の言葉がいたく自身に堪へ難く、はじめてかかる経験を、と云ふ意である。

但し「朝川」を男女の道であると断定してはならない。朝開けの川と云ふことを念頭に置いて味ふべきである。かう云ふところに歌としての味ひが生じてくるのである。異母兄妹の結婚が當時宥さるるとしても、何かそこに不自然のものが伴つてをつたのは事實である。

舍人皇子の御歌一首

一一七 丈夫や片戀せむと嘆けども醜の丈夫なほ戀ひにけり

片戀である事は萬々承知でそれを歎くのであるが、尙戀しく思はれる、と云ふ意である。「シコ」は、自嘲の意味がある。集中、「シコホトトギス」と詠まれてゐるなど参考になる。

「片戀せむと」は自己の心を客観した言ひ方である。一寸の鑑賞では直截にひびいて來ない句法であるが、よく味ふとなかなか妙味がある。舍人皇子は、天武天皇第五の皇子であらせられる。

舍人皇子、和へ奉れる歌一首

一一八 歎きつつ丈夫の戀ふれこそ吾が髮結の漬ちて濕れけれ

丈夫である君が、そのやうに歎き戀ひをればこそ、わたくしの髮結が濡れる、と云ふ意である。わたくしの髮結が濡れる、それは丈夫である君の歎きの心があればこそ、とも味つてもよいのである。舍人皇子は皇子の乳母、舍人氏の娘であるが故に、つまり皇子とは乳兄弟なりとする説がある。

弓削皇子紀皇女を思ふ御歌四首

一一九 芳野河行く瀬の早みしましくも夜通むことなく在りこせぬか
も

吉野川の流れゆく瀬の早く淀むことなきが如くに、しばらくそのやうにありたきものである。さう願ひたきものである、と云ふ意である。相見たき情の堪へ難く、紀皇女を愛しみ奉らんとして、御心の澁滞を歎かれてゐるのである。

紀皇女は、天武天皇の皇女、弓削皇子とは異母の兄妹であらせられる。

一二〇 吾妹子に戀ひつつあらずは秋萩の咲きて散りぬる花にあらま
しを

戀ひする心の堪へ難く、秋萩の花の散る如くになりたい。と云ふ意である。「花にあらましを」は舊訓である。「花ならましを」とする訓み方もあるが、ここでは舊訓を尊ぶ。

結句、童心に通ずるものがあるが、そこには、死んだ方がまだと云ふ思想が加はつてゐるのである。

一二一 夕さらば潮満ち來なむ住吉の淺香の浦に玉藻荇りてな

夕ぐれとなつたならば潮が満ちてくるから、潮の満ちて來ぬ間に玉藻を早く刈らう、と云ふ意である。眞淵は、「事故なきうちに、妹をわが得ばやてふ事を添つ、」と言つてをる。女を玉藻に譬へた譬喩歌とするのである。しかし、かう云ふ歌柄は、譬喩として解さなくとも、自然の趣きを現實的に充分に語つてゐるから、そこを感じなければならぬ。

浅香の浦。堺市の東に在り。

「浅香丘在住吉郡船堂村。林木綠茂。迎春露香。西臨蒼溟。遊賞之地。」攝津志。

一二三 大船の泊つる泊のたゆたひに物念ひ瘦せぬ人の兒ゆゑに

「人の兒ゆゑに」を、人妻とする説もあるが、さう解さなくとも、一人の女子をと云ふ意味に解しておいてもよい。戀慕の情に身も心も瘦せると云ふのである。思ひめぐらす心を、「大船の泊つる泊のたゆたひに」と譬へたのである。契沖曰く、「人ノ子とは、親の手に有をも人妻をもいへど、今歌にては、廣く我手に入らぬ人と心得べきか、異母の御妹を指てのたまへばなり云々」。「廣く我手に入らぬ人云々」は名言である。

三方沙彌園臣生羽の女に娶ひて、未だ幾時も經ず、病に臥して作れる歌三首

一二三 たけばぬれたかねば長き妹が髪この頃見ぬに亂りつらむか

三方沙彌

「たけばぬれ」は、あぶらついた黒髪の長く垂れてゐる感じである。その髪をたぐり揚げて結はへたならば美事に見ゆる妹が髪を、自分は病み臥してこのごろ見ないが、定めしその髪も櫛入れずして亂れてゐようか。と云ふ意である。婚姻の後に病臥して女を懷ふ男の情が、よく顯れてゐる歌である。

一二四 人はみな今は長しとたけと言へど君が見し髪亂れたりとも

娘 子

君が見た黒髪は、おほくの人達はいまは長いゆゑ髪揚げせよと言はるるが、私は何んとも思はぬ、髪が亂れてゐようとも、と云ふ意である。男に「亂りつらむか」と言はれ、「人はみな」と他を顧慮しながら答へてゐるところに、この娘子の面目がある。

一二五 橘の蔭ふむ路の八衢にもものをぞ思ふ妹に逢はずて

三方沙彌

契沖曰く、「此歌の意、様々に妹を思ふ由を云はんとて、上は次第に序にいへり、」云々。かう云ふ詠みぶりは、新たな感じを受けるものである。橘の並木の蔭にひとりもの思ふ作者の心を窺ひ知るべきであつて、單に序詞のみにとどまらぬ現實味を感じるのである。

石川女郎、大伴宿禰田主に贈れる歌一首

一二六 遊士と吾は聞けるを屋戸かさす吾を還せり鈍の風流士

大伴田主字を仲郎といへり。容姿佳艶にして、風流秀絶なり。見る人聞く者歎息せざるなし。時に石川女郎あり。みづから雙栖の感を成し、恒に獨守の難きを悲しむ。意に書を寄せむと欲して、いまだ良信に逢はず。ここに方便を作して、賤しき姫に似せて、おのれ塙子を提げて、寢側に到り、哽音喘足して戸を叩きて諮ひて曰く、東隣の貧女、火を取らむとして來りりと。ここに仲郎、暗き裏に冒隠の形を知らず、慮の外に拘接の計に堪へず。念の任に火を取り跡に就き歸り去りぬ。明けて後女郎既に自媒の愧づべきを恥ぢ、また心契の果さざるを恨む。因りてこの歌を作り、以て贈り謹戲す。

左註が、この歌の實際を語り得てゐるとは思へないが、あるところまで、かうした事實に據つて味つてみれば、この歌の内容が豊富になる譯である。「ミヤビヲト」は舊訓、「タハレヲト」である。仙覺曰く、「タハレトハ、ナヒク也。心ツヨカラスシテ、人ノイフコトニナヒク也。」契沖曰く、「タハレヲ」とは、好色の人の風流なるを云、「以上の説を大體根據として味へばよいのである。

左註の文意を少し分り易くしておく。

「大伴田主字を仲郎云々」は、田主は大伴旅人の弟、安麻呂の第二子ゆゑ、仲郎と云ふのである。「チウラウ」と訓んでも、「ナカツコ」と訓んでも、どちらでもよい。

「みづからの雙栖の感を成し云々」二人共に棲むことがかなはず、孤獨を守るに堪へ難くである。「良信に逢はず云々」は、よきつかひを得ず位の意である。そこで手段をめぐらして、塙子(なべ)を提げて、田主の寢室へ入つたのである。「啞音嗚足」しのび歩いて、低い聲でものを云ふ事である。

「冒隱の形を知らず」は、覆をもつて身をかくしてゐたのである。「慮の外に拘接の計に堪へ

ず」は思ひもつかぬ事で、賤姫のさまをして火を取りにきたのみと思つた田主は、止めて交りをもせず、念の任に火を取らしめて、石川女郎を送り歸した、と云ふ意である。女郎が夜明けて自分の行爲を恥ぢて、田主にこの歌を作り、「以て贈り誑戲す。」云々である。

大伴宿禰田主報へ贈れる歌一首

一二七遊士に吾はありけり屋戸かさす還しし吾ぞ風流士にはある

氣の利かぬ風流士と嘲られるが、貴女に屋戸をかさすに還したのは、眞の風流士であるからである。一矢酬いてゐるのである。

同じき石川女郎、更に大伴田主中郎に贈れる歌一首

一 二八 吾が聞きし耳によく似ば葦若末の足痛吾背つとめたぶべし

右は中郎の足疾によりて、この歌を贈りて問ひ訊ふなり。

第二句の訓み方のいくつかを抄出しておく。「ミニニヨクニツ」「ミニニヨクニル」「ミニニヨクニバ」等であるが、「耳によく似る」と云ふ訓み方は、どうも意味が直接に通じて来ない。雅澄は、「ヨクニツ」として、曰く「吾耳に聞しに、好似つと云が如し」云々。第三四句の、「アシカビノアシナへ」は、「アシノウレノアシタム」或ひは、「アシノハノ、アシイタワカセ」などの訓み方である。左註にみる如く、仲郎は足疾に悩んでゐたとして、吾が人の噂さによく聞いた如くに、あなたはわたくしが夜お目にかからうと行つたが、足を痛めて立つことができなかった。吾背よ、自愛されたし。と皮肉つてゐるのである。「葦若末の」は枕詞である。

大津皇子の宮の侍石川女郎、大伴宿禰宿奈麿に贈れる歌一首

一 二九 古りにし姫にしてや斯くばかり戀に沈まむ手童の如

一に云ふ、戀をだに忍びかねてむ手童の如

自分は時世に後れた、年老けた女であるのだが、童子の泣き沈むがごとくに、かくばかり戀心に堪へ得られずにゐる。と云ふ意である。

大伴宿禰宿奈麿は、大納言兼大將軍卿大伴ノ安麿の第三子である。

長皇子皇弟に與ふる御歌一首

一 三〇 丹生の河瀬は渡らずてゆくゆくと戀痛し吾弟乞通ひ來ね

皇弟を、鹿持雅澄は、長皇子御同腹の御弟弓削皇子であると断定してゐる。このやうに想像

して解釋してもよいであらう。

いま自分は、丹生の河瀬をおもひやりながら、いまだ渡る時を得ずに、行くことを躊躇してゐる、心戀しくてならぬ、此方へそちらから通つて來ませぬか、吾弟よ、と云ふ意である。「ゆくゆく」と戀痛し」は、行かう、行かう、と思つて心を痛めてゐると解した方がよい。

雅澄曰く、「丹生乃河は、大和志に、宇智郡丹生河、源出_レ自_三吉野郡加名生谷、經_二丹原生子等_一、至_二靈安寺村_一、入_二吉野川_一とあり、其河を隔て、彼方に皇弟住ひしなるべし、」云々。

柿本朝臣人麿石見國より妻に別れて上り來る時の歌二首并に短歌

一三一 石見の海 角の浦回を 浦なしと 人こそ見らめ 瀉なしと
磯なしと 人こそ見らめ よしゑやし 浦はなくとも よしゑ
やし 瀉は 磯は なくとも 鯨魚取り 海邊をさして 和多

豆の 荒磯の上にか 青なる 玉藻奥つ藻 朝羽振る 風こ
そ寄せめ 夕羽振る 浪こそ來寄せ 浪の共 彼より此より
玉藻なす 寄り寝し妹を 一に云ふ 妹がたもとを 露霜の おきてし來
れば この道の 八十隈毎に 萬たび かへりみすれど い
や遠に 里は放りぬ いや高に 山も越え來ぬ 夏草の 思
ひ萎えて 偲ぶらむ 妹が門見む 靡けこの山

妹と別れて來た人麿は、石見の海の角の浦を通りながら、おもふに、ここの石見の海の角の浦は、よき浦はなく、干瀉さへないと人はさう見るけれども、それは何とも思はぬ。かの和多豆の磯には、青い玉藻が在つて、朝夕の風に吹かれ、浪と共に靡いてゐる。その如くに、寄り寝した妹を、いま旅中に在つて、幾度か、越え來つた山をかへりみて思ひ偲ぶに、家に残してきた妹は、定めし思ひ萎えてゐるであらう。せめて妹のあたりをみたいものだ、目の前の山よ、うごけ、妹が門を見よう。と云ふ意である。

北海の角の浦の自然を叙して、和多豆の荒磯のうへに起る自然の變化を叙し、妹追慕の念をそこに巧妙に織りこまれた、技法の自由さをみる可きである。「靡けこの山」はまさに技巧もここまで發展するといふ窮極を示してゐる。

反歌

一三二 石見のや高角山の木の間に我が振る袖を妹見つらむか

この歌三句、「木の間に」に問題があらう。大方の説は、高角山に妹がのぼつて、人麿の振る袖を見ると云ふ解釋なのである。この點、井上通泰氏はやはり問題としてゐる。曰く、「句のまゝに三句を四句につづけて心得むにヨリといふ辭おちつかぬこゝちす。」云々。眞淵は「コノマユモ」と訓んで、曰く、「人まる道に出て願しつづ振そでを、妹は高角山にのぼりて見おくりつらんかと也、」云々。しかし、ここは、どうしても高角山に人麿がをつて、袖を振つてゐる

のであらう。高角山に妹をのぼらしたのは後世流の解釋である。

高角山。石見國那賀郡野津に在る。

一三三 小竹の葉はみ山もさやに亂げども吾は妹おもふ別れ來ぬれば

「小竹の葉は」と言つて、小竹の葉の山路に群生する光景をあらはした表現は、感動するものが深かつたから、かう單純にゆくのである。山中、風に吹かれる小竹の葉の音に寂寥身に迫るが、それよりも吾は、別れ來つた妹のことが思はれてならぬ。と云ふ意である。調子がゆつくりおちついてゐて、將に短歌の妙味を發揮してゐる。

或本の反歌

一三四 石見なる高角山の木の間ゆも吾が袖振るを妹見けむかも

この歌、(一三二)の歌の句法と對照してみても味ふ時、どこかに實際のものからやや遠去つてゆく傾きがある。結句などによつてそれが著るしい。「木間從文」を、舊本では、「コノマニモ」と訓んでゐる。契沖は、「コノマユモ」と訓み、雅澄は、「コノマヨモ」と訓んでゐる。日本書紀、神武紀の歌に、「たたなめていさなの山の木の間ゆもい行き守らひ云々」などがある。

一三五 つぬさはふ 石見の海の 言さへぐ 韓の崎なる いくりに
ぞ 深海松生ふる 荒磯にぞ 玉藻は生ふる 玉藻なす 靡
き寐し兒を 深海松の 深めて思へど さ寐し夜は 幾だに
あらず 延ふ蔓の 別れし來れば 肝向ふ 心を痛み 思ひ

つつ かへりみすれど 大舟の 波の山の 黄葉の 散りの
亂りに 妹が袖 さやにも見えす 嬌隠る 屋上の 室上山
山の 雲間より 渡らふ月の 惜しけども 隠ろひ來れば
天づたふ 入日さしぬれ 丈夫と 思へる 吾も 敷妙の 衣
の袖は 通りて沾れぬ

石見の海の韓の埼である、海の中の石に深海松が生ひ、荒磯には玉藻が生ひ、その玉藻の如くに添寝した妹のことを思ふに、寄添うて、い寝た夜は少なかつたのを省みられる。いま妹と遠く別れて此處にゐる吾れの心は、痛々しく、起伏す山のあたりの黄葉の散るのをみる時、妹が袖の見えぬを偲ばれ、屋上の山にたなびく雲間にわたる月を眺めては、心に歎き、日の暮の入日の影をみては、さすがに丈夫と思ひゐる吾も、衣の袖は涙に沾れる。と云ふ意である。

「つぬさはふ」深海松の「延ふ蔓の」肝向ふ「大舟の」嬌隠る「敷妙の」などは、枕詞であるが、形式にとどまらず、前後の句間に融合して、詞のひびきを傳へてゐるから、幾度か鑑賞

することによつて意味がはつきりしてくるのであらう。「大舟の渡の山の」は、大舟にて海を渡る、と云ふ意味があるので、つまり「大舟は」は「ワタリ」の枕詞となるのである。

韓の埼。石見國那賀郡野津村の東北。

反歌二首

一三六 青駒の足搔を速み雲居にぞ妹があたりを過ぎて來にける

一に云ふ、あたりは隠り來にける

みづから乗る馬の歩みの速いゆゑに、妹が住むあたりは、またたくまに過ぎて、遠く來てしまつた、と云ふ意である。「青駒」は青毛の馬である。「足搔」は馬の歩む動作を言つてゐるのである。「雲居にぞ」は、はるかに隔てて見る雲の立つさまであるが、眞淵曰く、「此言をかく遠き

事にいふは轉し用る也、」云々。契沖は、「青駒」について「青白雜毛馬也、」と言つてゐるが參考になる。人麿一流の技法をうかがへる歌である。

一三七 秋山にちらふ黄葉須臾はな散り亂れそ妹があたり見む

一に云ふ、散りな亂れそ

「落つる」を、「散らふ」と云ふ訓み方があつたが、ここはどうしても、「落つる」の方が趣きを深く傳へる。「秋山に落つる」つまり、「な散り亂れそ」と云ふ句の運びが落付いてくるのである。妹が住むあたりをみたい、しばらくの間も黄葉の亂れて散つてくれるな。と云ふ意である。黄葉が散り亂れて先方が見えぬ、と云ふ心である。「シバラク」を、「シマシク」と云ふ訓み方もある。

或本の歌一首并に短歌

一三八 石見の海 角の浦回を 浦無しと 人こそ見らめ 濁無しと
 人こそ見らめ よしゑやし 浦は無くとも よしゑやし 濁
 は無くとも 勇魚取り 海邊を指して 柔田津の 荒磯の上
 に か青なる 玉藻奥つ藻 明け来れば 浪こそ来寄せ 夕
 されば 風こそ来寄せ 浪の共 彼寄り此寄る 玉藻なす
 靡き吾が寝し 敷妙の 妹が袂を 露霜の 置きてし来れば
 この道の 八十隈ごとに 萬度 かへりみすれど いや遠に
 里放り来ぬ いや高に 山も越え来ぬ 愛しきやし 吾が孀
 の兒が 夏草の 思ひ萎えて 嘆くらむ 角の里見む 靡け
 この山

この歌、(一三二)の歌の意味と同様であつて、云ふまでもないが、大きい變化は「和多豆」を、「柔田津」と改めたり、「妹が門見む」を、「角の里見む」と改めたのは、後世に行はれた、地理的の根據を明らかにしたい推察なのであらう。鑑賞者は、この歌の句法の變化に興味を抱いてはならない。

反歌

一三九 石見の海打歌の山の木の際より吾が振る袖を妹見つらむか
 右歌の體同じといへども句々相替れり。此に因りて重ねて載す。

この歌、「石見の海打歌の山」となつてゐるのであるが、鹿持雅澄曰く、「石見之海と有はいかゞ、高角山とうけたれば、必々海とはいふまじきをや、」云々、「打歌山は、按に、打歌は、竹

綱の草書を見まがへて、寫し誤りたるにや、然有ばタカツヌヤマと訓べし、」云々。

柿本朝臣人麿の妻 依羅娘子、人麿と相別るる歌一首

一四〇 勿念ひと君は言へども逢はむ時いつと知りてか吾が戀ひざらむ

そのやうにくよくよ思ふなと君は言ふけれども、いま別れてしまつては、何時又逢ふであらうか、歎かずにはをられぬ。と云ふ意である。依羅娘子について岸本由豆流曰く、「この娘子は、人麿の後妻にて、人麿、石見國の任に赴ても、この娘子は、京に留り居りしが、人麿さるべき事ありて、石見より京へ仮に上りて、又石見へ下らんとせられし時、この娘子の、京にとどまりてよめる歌也。さて、依羅は、もと攝津、河内などの地名なりしが、やがて氏とはなれる也。」云々。このやうに解しておけば、いかにも人麿の妻である事がはつきりしてくるのであ

るが、依羅娘子の歌でなくて、人麿の歌であると後世人に云はるる程、甚だ手際よい歌ひ振りである。人麿の手が入つてゐるのかも知れぬ。

挽歌

のちのをかちとのみや
後岡本宮御宇天皇代

あふとにがしむらひのすめとこ
天豐財重年足姫天皇 (齊明天皇)

有間皇子自ら傷みて松が枝を結べる歌二首

一四一 磐代の濱松が枝を引き結び眞幸くあらば亦かへり見む

みづからの齡の永くて、幸ひたらん事を松に寄せてゐる心である。「引き結び」は、「よはひをちぎり、またしるしにとて、木草をむすべる也。」と岸本由豆流は言うてゐる。この説は穩當で

よい。橘守部は「引結」、引よせ給ふを云ひて松を引きてむすぶにはあらず。」と云うてゐる。

54

有馬皇子は、孝徳天皇の御子である。齊明天皇の代に、御謀反の疑ひがあつて、紀伊國に引かれ給ひ、藤白坂で殺され給うたのである。御歳十九。日本書紀の文章を引用しておかう。「是に皇太子親ら有馬皇子に問ひて曰く、何故か謀反する。答へて曰く、天と赤兄と知る、吾れ全ら解らず。庚寅、丹比小澤連國襲を遣して、有馬皇子を藤白坂に絞らしむ。」皇太子は中大兄皇太子である。

後崗本宮。大和國高市郡大字岡、高市崗本宮の舊地。齊明天皇の皇居。

磐代。紀伊國日高郡。

一四二家にあらば筥に盛る飯を草枕旅にしあれば椎の葉に盛る

「筥」は、飯を盛る器である。「椎の葉に盛る」は、木の葉の上に飯を盛ることである。「椎」を「檜」とする説と、椎の木枝を折敷いて盛つたのであらうと云ふ説もあるが、木の葉に盛ると云ふことは、事實であつて、哀傷はそこに深く感じられるのである。

長忌寸意吉麻呂結松を見て、哀咽せる歌二首

一四三 磐代の崖の松が枝結びけむ人はかへりて亦見けむかも

有馬皇子を後世に至つて、偲び奉つた歌であつて、「人はかへりて亦見けむかも」は有馬皇子は、「濱松が枝を引結び」と申されたが、果して再びその松が枝をかへりみられたであらうか、否かへり見る時が無かつたと云ふ、皇子の「眞幸くあらば亦かへり見む」と詠まれたお歌の心を推察し奉つてゐるのである。有馬皇子の御事蹟が後世に至つて、結松と云ふ名稱を生じたのである。

55

長忌寸意吉麻呂、は卷一、(五七)の作者、奥麻呂と同じ人である。

一四四 磐代の野中に立てる結松情も解けずいにしへ思ほゆ

未だ詳かならず

いにしへ、有馬皇子が此處に來られて歎かれた松の、いまは磐代の野中に結松としてのこつてをるが、その松をみる時、結ばるる如くこころも引き寄せらるる。と云ふ意である。眞淵曰く、「此松、むすばれながら大きと成て、此時までありけん」云々。注の、「未だ詳かならず」に就いて、契沖は、「注の未詳こそ又何故にいへるにか詳ならね、衍文にや、若下の大寶元年の歌に作者なければ、そこより此にまじはり來れるか」と言うてゐる。

山上臣憶良追和せる歌一首

一四五 鳥翔なす有り通ひつつ見らめども人こそ知らね松は知るらむ

右件の歌等、柩を挽く時に作る所にあらずといへども、歌の意に准擬す。

故以て挽歌の類に載す。

鳥の天を飛ぶごとくに、有馬皇子の御魂は通ひつつ結松を見そなはずが、現世の人には、それは知り得ぬことである。なれども松は知つてゐるであらう。と云ふ意である。「ツバサナス」を、「トリハナス」「カケルナス」等の訓み方があるが、初句において、鳥が天を翔るのであると判断するのは、可成り無理なところもあらう。

大寶元年辛丑紀伊國に幸せる時結松を見る歌一首 柿本朝臣麻呂 歌集中に出づ

一四六 後見むと君が結べる磐代の子松が末を又見けむかも

「後見むと君が結べる」は有馬皇子のことを申し上げてゐるのである。その、結松の子松の梢を君は又かへり見られたであらうか。と云ふ意である。「子松」は小さい松ではなくて、大きな松であると云ふ。つまり「子」は美稱であるとするのである。この歌になると可成り技巧的になつてゐる。

近江大津宮御宇天皇代

天命開別天皇（天智天皇）

天皇聖躬不豫の時太后の奉れる御歌一首

一四七 天の原ふりさけ見れば大王の御壽は長く天足らしたり

日が輝やいて、廣く澄み渡つた空を仰ぐ時、天皇の御壽の悠久であることが偲ばれる。と云ふ意である。橘守部は、一二句の表現を、「寢殿、屋上を仰ぎ給ふを云ふ。」と言つてゐる。又、

「御壽は長く天足らしたり」を、「其屋上に千尋繩を長く結び垂らせるを云」かう云ふ具合に知識を補足して考へれば、いかにもそのやうに解する事ができるが、現代の作歌心理から推察すれば、ここはどうしても蒼穹を仰ぎみて、無限の感慨の中に、天皇の御壽の長からん事を思ひ奉つたのである。天皇の聖躬不豫の時、すなはち、大御身の疾病にかかり給うた、それを祈り奉る御心が含まれてゐるのである。「太后」は皇后倭姫である。天皇は、天智天皇。

近江大津宮。滋賀縣、南滋賀村崇福寺の地。天智天皇の皇居。

一書に曰く、近江天皇聖體不豫御病急なりし時太后の奉れる御歌

一首

一四八 青旗の木旗の上を通ふとは目には見ゆれど直に逢はぬかも

「青旗」を「白旗」とする説があり、「木旗」を「小旗」とする説があるが、ここを都合よく

考へれば、「青旗」は「青い旗」であつて、「木旗」は、「小さい旗」であるとするのである。或ひは、「此は木幡といはん爲の枕辭なり、木のしげりたるは青き旗を立たらんやうに見ゆればなり」と契沖は云うてゐる。つまり、「木旗」を木幡の地としてゐるのである。大體このやうに解釋してもよいのであるが、かう云ふ歌は、表現されてゐるものによつて、素直に解しておくのがよいと思ふ。「青旗の木旗の上」と云ふのは、青い旗の旗竿の上をとつて、「通ふとは」は、天皇の御魂が通ふと解すべきである。「目にはみゆれど」は、正に御魂のそこに見ゆる心地のする、と云ふ意味である。「直に逢はぬかも」は、天皇の御魂に直接に逢ひ奉ることのかなはぬ。と云ふ意である。

近江天皇は、天智天皇である。

天皇崩じ給ひし時倭太後の御作歌一首

一四九人はよし思ひ止むとも玉蔭影に見えつつ忘らえぬかも

天皇の崩御に遇ひ奉り、人心は悲しみのうちにあるが、時にその心も止むことがあらう。しかれどもわれは、御面影のしきりに偲ばれて、思ひ忘れることができぬ。と云ふ意である。

「玉蔭」は日蔭である。「ヒトハヨシ」舊訓「ヒトハイザ」である。結句、「ワスラレヌカモ」である。一首の意味を知る上においては、どちらでも無理はない。

天皇崩じ給ひし時婦人の作れる歌一首姓氏不詳

一五〇現身し 神に堪へねば 離り居て 朝嘆く君 放れ居て 吾
が戀ふる君 玉ならば 手に巻き持ちて 衣ならば 脱ぐ時
もなく 吾が戀ひむ 君ぞ昨夜 夢に見えつる

現世に生き存らへてゐるおのが身は、天隠り給うた大君にしたがひ奉ることのかなはぬ故に、君を偲び奉る心は、朝起きては嘆き戀ふるのである。もしも玉であるならば手に持つて、衣で

あるならば身にまとひ、ひたすらに戀ひ奉らむ、大君を昨夜夢に見奉つた。と云ふ意である。「朝嘆く君」は、「朝嘆く君を」である。朝にわれは嘆くよ、である。ここを、「君ぞ昨夜夢に見えつる」に關聯して味はぬところに、「朝嘆く君」と云ふ句法が生きてくるのである。この歌、天皇崩じ給ひし時の作歌としては、やや品格が下るところがある。「現身し神に堪へねば云々、」との句法は學ぶべきものがあるのであるが。

天皇の大殯の時の歌二首

一五一 斯からむと豫ねて知りせば大御船泊てし泊に標繩結はましを

額田王

「かからむと豫ねて知りせば」は、天皇の崩御にゆくりなく遇ひ奉られた感慨である。近江の湖の、天皇御遊の大御船の泊てさせられた渚に、せめて標繩なりとも結びおきたかつたもの

を。と云ふ意である。現神であらせられた時を戀ひ奉る御歌である。「大殯」は、天皇崩じたまひ、別宮におき奉るを云ふのである。

天皇は、天智天皇。

一五二 やすみししわご大王の大御船待ちか戀ひなむ志賀の辛埼

舍人吉年

卷一の人麿作(二〇)「さざなみの志賀の辛埼幸くあれど大官人の船待ちかねつ」先づこの歌が聯想さるであらう。舍人吉年のこの歌では、志賀の辛埼が大王の大御船を待ち戀ひてゐると云ふことが、明らかに云ひ得る。

因に云ふ。舍人吉年の歌は、天智天皇十年であり、人麿の歌は、持統天皇三年である。

太後の御歌一首

一五三 鯨魚取り 淡海の海を 沖放けて 榜ぎ来る船 邊附きて
榜ぎ来る船 沖つ權 甚くな撥ねそ 邊つ權 甚くな撥ね
そ 若草の 夫の 念ふ鳥立つ

この歌、主とするところは、天皇崩れ給へる時放たれる、「放鳥」のことを歌つて、天皇の崩御を悲しまれてゐる事なのである。契沖曰く、「奥サケテコギクル舟とは、奥をさかりて此方にくると云にはあらず、奥の遠く放れる方より来る舟なり、」云々。雅澄曰く、「奥放而は、奥方へ遠放てなり、（奥を放りて、此方に来ると云意には非ず、）」云々。兩者の説は少し異なる。「鯨魚取り」は淡海の海の枕詞、「若草の」は「つま」の枕詞。「ツマノオモフトリタツ」に深く秘められた作者の感慨が籠つてゐるのである。或は、榜ぐ船の權を靜かにあげ給へ、いま湖の面に、水鳥の飛ぶのを見よう、その鳥は、かつて天皇の愛くしまれた鳥であると、云ふ意であらう。

太后は、倭姫皇后である。

石川夫人の歌一首

一五四 さざなみの 大山守は誰が爲か 山に標繩結ふ 君も在らなくに

「さざなみの」は近江の枕詞であるから、ここは、さざなみの近江國の山を守るのは、誰が爲かと云ふのである。それは、天皇が山に入り給ひ、花紅葉を叡覽し給ふが故に、山守はおかるのであつて、現在は、叡覽し給ふ天皇も崩れ給ひて在りませす、山に標繩を結び守るのも、張合ひが無い、と云ふ意である。「大山守」の「大」は美稱である。

石川夫人。天智天皇の夫人。

山科御陵より退り散りし時、額田王の作れる歌一首

一五五 やすみしし わご大王の かしこきや 御陵仕ふる 山科の

鏡の山に 夜はも 夜のことごと 晝はも 日のことごと

哭の目を 泣きつつ在りてや 百磯城の 大宮人は 去き別

れなむ

御陵を守り仕へ奉る人々は、夜も晝も、聲上げて嘆き悲しみ、仕へ奉る日の過ぎたならば、たがひにゆき別れゆく、その後の御陵はいかに寂しくあるであらう、と云ふ意である。「山科の鏡の山」は、山城國宇智郡、山科の地にある山である。つまり天智天皇の御陵である。「夜のことごと」は終夜の意。「日のことごと」は終日の意。「百磯城」は大宮人の枕詞である。「ネノミヲ」は舊訓、「ネニノミヲ」である。聲を上げて泣く意である。

明日香清御原宮御宇天皇代

天渟中原瀛真人天皇 (天武天皇)

十市皇女薨じ給ひし時、高市皇子尊の御作歌三首

一五六 三諸の神の神杉已具耳矣自得見監乍共いねぬ夜ぞ多き

この歌、舊本に、「三諸之神之神須疑已具耳矣自得見監乍共不寢夜叙多」とある。これでは何の事やら分らぬ。そこで、眞淵は左の如く訓んでゐる。「三諸之神之神須疑已免乃美耳將見管本無不寢夜叙多」橋守部は、「三諸之神之神須疑已具耳之自影見盈乍不寢夜叙多」その他、諸説が多いが、守部の訓み方は穩健である。

十市皇女は、天武天皇の皇女、高市皇子は異母弟であらせられる。

明日香清御原宮。大和國高市郡、天武天皇の皇居。

一五七 神山の山邊眞蘇木綿短木綿かくのみ故に長くと思ひき

「カミヤマノヤマベマソユフミジカユフ」とつづけて訓むところに、この歌の音調のよさが知られて、哀れ限りなきものがある。「眞蘇木綿短木綿」は、十市皇女の短命でましましたことを言外に籠らして歌ひ奉つてゐるのである。「かくのみ故に」は、「かくのごとくに短き命であらせられたのを」と釋くべきか。「長くと思ひき」は「長く思ひわたる」とすべきである。「神山」は「三輪山」である。「眞蘇木綿」は、「マ」が美稱であつて、「木綿」のことである。眞淵曰く、「ゆふをほめて眞そと云也」云々。「木綿」は楮の纖維で製した、布、又は紙の名。「楮」は、「梶」「殼」とも云ふ同種類の木である。「短木綿」は、「木綿」の短いことを言うてゐるのである。

一五八 山吹の立ちよそひたる山清水汲みに行かめど道の知らなく

山の清水の流るところに、山吹の花は盛りである、その清水を汲みに行かうと思ふけれども、行く道が分らぬ、と云ふ意である。「立ちよそひたる」は、山べに葬り奉つた皇女の御姿を、山吹に譬へたとする説もあるが、一應肯ける。橘守部は、山吹の花の黄色いことから、黄泉、幽冥の界として解してゐるやうであるが、つまり、黄色い泉、それは山吹の花の水に寫つて、山清水が黄に染まると云ふことから聯想されたものである。守部の説は、やや深入りしてゐる感があるであらう。ただかう云ふことは言ひ得る、山清水にうつる山吹の影は、十市皇女の在りし世の御姿であると云ふ想像である。

天皇崩じ給ひし時、太后の御作歌一首

一五九 やすみしし 我大王の 夕されば 見し賜ふらし 明けくれ
ば 問ひ賜ふらし 神岳の 山の黄葉を 今日もかも 問ひ
給はまし 明日もかも 見し賜はまし その山を 振放け見

つつ 夕ゆふされば あやに悲かなしみ 明あけくれば うらさび暮くらし
荒あ妙たへの 衣ころもの袖そでは 乾ひる時ときもなし

神岳の山の黄葉はいま盛りである。その黄葉を仰ぎ見るにつけて、大君の朝夕眺められては問ひ給うたそのお聲が、昨日今日聞えくるが如く偲おもげられると云ふ、大君御在世の時を追慕し奉る情の、いかにもよく表現されてゐる御歌である。

「神岳かみさかの山の黄葉もみぢを」を中心として、實に詞が自由に、素朴に運用されてゐるのを見るべきである。「その山を振放おけ見みつつ」と云つて、明暮あけくれの御自身の御動作を、きはめて端的に歌はれ、單純な技法ではあるが、現實の境を巧妙に表現されてゐると思ふ。

天皇は、天武天皇、太后は、持統天皇である。

神岳かみさか。大和國高市郡。飛鳥の神名火山である。すなはち三諸山とも云ふ。

一書に曰く、天皇崩じ給ひし時、太上天皇の御製の歌二首

一六〇 燃もゆる火ひも取とりて褻つみて袋ふくろには入いると言いはずやも知しるといはなくも

舊本の訓を左に記してみよう。

燃トモシヒモ火物取トリ而褻ツミ而褻ツミ福路庭入フクロニイルトイハス不言八面智男雲ヤモチヲノコトモ

仙覺註釋して曰く、「此歌ノ心ハ、葬禮ノナラヒ、フタ、ヒモノヲアラタメ、モチキルコトハ、イムヘキコトナレハ、死人ノマクラカミニ、トモシタル火ヲモチテ、葬所ニテモ、モチキルヘキ也。サテトモシヒモ、トリテツ、ミテ、フクロニハ、イルトイハスヤトヨメル也。モチヲノコクモトハ、モツヘキノコモ、キタルトイフ歟。」云々。仙覺の解釋は甚だ明快である。後世に至つて、下河邊長流は、「トモシヒモ」を、「モユルヒモ」と訓んで、眞淵は、四五句を、「イルトイハズヤモシルトイハナクモ」と訓み改めてゐる。長流と、眞淵の訓が確立して、今日に及

んでゐるのであるが、他にまだ幾つかの訓み方がある。そこで眞淵の解釋を引用しておく。後世も火をくひ、火を蹈わざを爲といへば、其時在し役、小角がともがらの、火を袋に包みなどする、恠き術する事有けん、さてさるあやしきわざをだにすめるに、崩ませし君に逢奉らん術を知といはぬがかひなしと、御なげきの餘にの給へる也、云々。

一六一 北山にたなびく雲の青雲の星離りゆき月も離りて

星と月とが晴天に移りゆく光景を詠んだものであつて、「青雲」は空のよく晴れ渡つたことを云ふのである。その晴れた北の方の山に、たな引く雲、と云ふ意である。大君崩御のありさまを、大空に寄せて歌はれたところ、なかなか新らしい方向を示してゐる。「向南山」あるひは、「アマノガハ」と訓む守部説はどうかと思ふ。

天皇崩じ給ひし後、八年九月九日御齋會を奉爲にせし夜夢の裏に

習ひ賜へる御歌一首

一六二 明日香の清御原の宮に 天の下 知ろしめしし やすみし
し 吾大王 高照す 日の皇子 いかさまに 思ほしめせか
神風の伊勢の國は 奥つ藻も 靡みたる波に 鹽氣のみ
香れる國に 味凝 あやにともしき 高照す 日の皇子

この歌、持統天皇の御製とされてゐる。歌柄はいかにも品格を備へてゐる。しかし、題詞に看ると、夢の裏に習ひ賜へる御歌であると云ふ觀念をもつてみる時、句法の上に、心もとなさを感じず。ただ、この歌の生命とするところは、「神風の伊勢の國は奥つ藻も靡みたる波に鹽氣のみ香れる國に味凝あやにともしき」云々の詞句の運びである。かう云ふ點が、歌の味ひであつて、意足らずして眞實を傳へてゐるのである。「ウマコリ」枕詞。八年九月九日は、天武

天皇の御忌日である。

藤原宮御宇天皇代

高天原廣野姫天皇（持統天皇）

大津皇子薨じ給ひし後、大來皇女伊勢の齋宮より京に上りし時、御

作歌二首

一六三 神風の伊勢の國にもあらしを何にか來けむ君も在らなくに

朱鳥元年十月三日、大津皇子は、譯語田舎で死を賜うてゐる。御謀叛のことが發覺したのである。同じ年、元年十一月に、大來皇女は京に上られてゐる。日本書紀に、「十一月丁酉朔壬子、伊勢の神祠に奉まつる皇女大來還りて京師に至る」云々。心急いで京師に上りきたつたが、すでに大津皇子は薨ぜられてをり、何頼みあつて自分は來たのであらう、むしろ伊勢國に止まつてゐたかつたものを、と云ふ意である。

大津皇子は天武天皇の御子であつて、大來皇女は御姉にあたらせられる。悲しみの詞は外に顯はれてをらぬが、哀れ深い御歌である。四句、「イカニカ」と云ふ訓み方もある。

一六四 見まく欲り吾がする君もあらなくに何にか來けむ馬疲るるに

「見まく欲り吾がする君も」と一氣に訓む可きである。心切に逢はうと欲してゐた君も、いまは此世に在しませぬ。何しに京師まで來たのであらう、馬も疲れたのに、と云ふ意である。眞淵曰く、「同じさまにて言を少しかへたるは、いにしへ有し一つのさま也、」云々。

大津皇子の屍を葛城の二上山に移葬りし時、大來皇女哀傷して御

作歌二首

一六五 現身うつせみの人ひとなる吾われや明日あすよりは二上山ふたかみやまを兄弟いりせと吾わが見みむ

76

世上よに生き存ぞふる吾われは、明日あしたよりは、わが弟君あにきみの屍しかばねの移うつ葬さうられた、葛城きりぎりすの二上山ふたかみやまを、弟君あにきみと
思おもうてみよう、と云いふ意いである、舊本ふるほん「弟世いせ」であるが、「只弟ただあに」「妹背いもせ」「弟世あにせ」「弟世あにせ」「弟世あにせ」
等の訓み方があつて、煩雜はんざつである。で、私説しせつを述べるならば、「オセ」とするのである。つまり、
「弟世あにせ」と訓む。「セ」は女の男を呼ぶ詞であつて、「オ」は敬ひの接頭語として味あじへばよい。

二上山ふたかみやま。大和國北葛城郡。葛城山の一部。

一六六 磯いその上うへに生おふる馬醉木あしびぎを手折たぎらめど見みすべき君きみが在ありといは
なくに

右の一首は、今案するに、葬さうを移す歌に似ず。蓋し疑ふらくは、伊勢神宮
より京きやうに還りし時、路上じやうじやうに花はなを見て、感傷かんじやう哀咽あいはげしてこの歌を作りませるか。

水邊みづべの磯いその上に馬醉木あしびぎの花はなは盛りであるのをみると、手折たぎつて君きみに見みせたいと思おもふが、いま
はこの世よには君きみは生きてをられぬ、と云いふ意いである。「馬醉木あしびぎ」を、「木瓜ぼけ」であるとか、「躑躅つとむ」
であるとか云いふ説は、この歌を味あじふうへに、品格しきかくを減へするものであつて賛成さんせいできぬ。「アシビ」
つまり、「アセビ」であるから哀調あゐてうがあるのである。左註さしゆの文章ぶんじやうを、契沖せきちゆうは誤りとして、曰いく、
「此註こししゆは撰者せんしやの誤ごなり、所謂すゐせん智者ちゆうしや千慮せんりよ必有必ず一失いつしつとは此事こじなり。」云々。つまり大伯皇女おほひらひめみが伊
勢いせより都みやこへ還りたまうた時は、十一月じゅういちがつであつて、「馬醉木あしびぎ」の花はなの咲さくころではないとする説せつな
のである。そこで契沖せきちゆうは、「此は明々年めいめいねんの春花はるはな盛さかの比ひ、皇子みまろの尸しかばねを移葬うつさうに因よて感じてよみ給たまふな
るべし」と言いつてゐる。以上いじやうは大伯皇女おほひらひめみの伊勢いせより京都きやうとへの往還おうわんの記録きらくに準據じゆんこしての説せつである
が、必ずしも手折たぎる馬醉木あしびぎが、花はなが咲さいてゐると解ときなくもよいので、常緑じやうりよくの灌木くわんぼくとして味あじへ
ば、花はなの咲さく馬醉木あしびぎでなくとも、情景けいけいがよく肯かたける。

日並皇子尊の殯宮の時、柿本朝臣人麿の作れる歌一首并に短歌

一六七 天地の初の時 ひさかたの 天の河原に 八百萬 千萬
神の神集ひ 集ひ坐して 神分ち 分ちし時に 天照す
日靈尊 ひるめのみこと のぼる日女の命 天をば 知ろしめすと 葦原の 瑞穂
の國を 天地の 依り合ひの極 知ろしめす 神の命と 天
雲の 八重かき別きて 一に云ふ、天雲 別きて 神下し 坐せまつりし
高照す 日の皇子は 飛鳥の 淨の宮に 神ながら 太敷き
まして 天皇の 敷きます國と 天の原 岩戸を開き 神上
り 上り坐しぬ 一に云ふ、神登り わが大王 皇子の命の 天の下
知ろしめしせば 春花の 貴からむと 望月の 満はしけむ
と 天の下 一に云 四方の人の 大船の 思ひ憑みて 天つ水
仰ぎて待つに いかさまに 思ほしめせか 由縁もなき 眞

弓の岡に 宮柱 太敷きまし 御殿を 高知りまして 朝ご
とに 御言問はさす 日月の 數多くなりぬれ そこ故に
皇子の宮人 行方知らずも 一に云ふ、さす竹の皇子

天地の初めである時、天の河原に幾萬の神達が集ひ、神議りあそばされ、天照日靈尊が天をば治めらるるところとなつて、そこで天の下である、葦原の瑞穂の國は、天地の寄り合ひのあらん限りを知られたまひ、天雲を分けて神を瑞穂の國に下したまうた。されば飛鳥の淨の宮に代々をしろしめす神にまします天皇の御代に、日の皇子（日並皇子）は、天の原の岩戸を開いてお崩れなされた。この皇子が、もし天下をお治めなされたならば、春花の榮ゆる如く、望月の照り満ちる如く、天下の四方の人々は皇子を憑み、雨の降るを仰いで待つが如くであるのに、どうしたことが、ゆかりの無い眞弓の岡に御殿を置きたまうた。ゆゑに朝毎に御聲も聞かれず、月日の永く経て、皇子に奉仕する宮人も、皆たのみを失つて御殿を去つて行く、と云ふ意である。

この長歌を鑑賞するには、「神下し坐せまつりし」までを一段として、「神上り上り坐しぬ」を二段として、後は一氣に訓み下す可きである。やや具體的に識らうとするには、「日靈尊」は天照大神と申す。「神の命と」は天孫彦火瓊杵命を申す。「飛鳥の淨の宮に神ながら太敷きまして」この四句を眞淵は、「是まで四句は、天武天皇御代しらする間を申す」と言つてゐる。「高照す日の皇子」を、鹿持雅澄は、天武天皇を指し奉ると言つてをるが、賛成できぬ。以上である。

日並皇子、或ひは草壁皇子。天武天皇の御子であらせられる。文武天皇の父尊。

眞弓の岡。大和國高市郡坂合村眞弓。

反歌二首

一六八 ひさかたの天見るごとく仰ぎ見し皇子の御門の荒れまく惜し

も

天を仰ぎ見る如くにお慕ひ奉つた、日の皇子のお崩れあそばされて、皇子の住みたまへる御殿の荒れゆくのが惜しまれる、と云ふ意である。眞淵曰く、「こは高市郡橋の島宮の御門也」云々。「人万呂即舍人にてその守る御門を申す也けり、」と言つてゐる。或は、「御門」は「御殿」を云ふのであつて、特に、「御門」であると断定はできないと云ふ説もある。しかし、「御門」はやはり、「御門」として味ふところに此歌のよさがあるのである。

一六九 あかねさす日は照らせれどぬばたまの夜渡る月の隠らく惜し

日並皇子を月に譬へ奉つた歌である。日はかがやき照るけれども、夜空に照りわたるその月

の隠れてゆくのは惜しまれる、と云ふ意である。上句と、下句を、あまり比較して解釋してはならない。「日は照るけれども」月は照るけれども」と印象的に味ふべきである。契沖は、「アカネサス」の枕詞を、「茜刺」は日の赤みて匂ふ心なり」と言つてゐるが、情味のある言葉である。

註の文章、「後の皇子尊」は高市皇子のことであると云ふ。高市皇子は、天武天皇の皇子であらせられる。鹿持雅澄曰く、「此、註なき本もあり、此は古へ、しかありし本の有しを、按る時に註せるものなり、」云々。

或本の歌一首

一七〇 島の宮勾の池の放ち鳥人目に戀ひて池に潜かず

日並皇子の在しまさぬ島の宮の池に、放ち鳥が人の來るのを戀しく思ふ如くに、水中に潜らずに浮いてゐる、と云ふ意である。「勾の池」について種々説があるやうであるが、岸本由豆流

の説を擧げておく。「こは御庭の中の池ながら、勾は地名也。安閑天皇の宮を、勾金箸宮と申す、ここにて、大和國高市郡なり。大和志高市郡の條に、曲川、曲岐宮、勾池などあり、皆同所なるべし。」と云つてゐる。山田孝雄氏は、地名説を疑つて、「ここは恐らくはその池の形などより名づけられしものならむか。」と云つて、御庭の中の池であるとするのである。だが池の形云々の説には同感できぬ。當時、「マガリ」と云ふ詞が、何かの場合に名付けらるると云ふ風習などがあつたとしたならば、面白いのであつて、少くとも、さう云ふ背景を感じてこの歌は味ふべきである。この歌、恐らくは、次ぎの「宮の舍人等二十三首」中に入るべきものなのであらう。

皇子尊の宮の舍人等慟傷して作れる歌二十三首

一七一 高光る我が日の皇子の萬代に國知らさまし島の宮はも

皇子尊は、日並皇子である。舍人等は、佐太、岡の御喪舎に宿直する人々である。

いよいよ高く尊き御身であらせられた皇子は、この島の宮に在られて、天下をお治めなさらうとされたのであるが、遂に皇子は薨くなられて、島の宮はいまは哀しき限りである、と云ふ意である。「シラサマシ」は敬語である。「國を治められたであつたらう」の意である。「シマノミヤハモ」は、やや過去のことを追想してゐる詠嘆とみてよい。

島の宮。大和國高市郡島庄の地。

一七二 島の宮上の池なる放ち鳥荒びな行きそ君坐さすとも

「ウヘノイケナル」を、鹿持雅澄は、「マガリノイケ」と訓んでゐるが、「ウヘノイケナル」がよい。この方が、情景がはつきりするのである。皇子の坐しまさぬ島の宮の池の水鳥よ、君が

坐さなくとも、人に疎くなりゆくな、と云ふ意である。

一七三 高光るわが日の皇子の坐しせば島の御門は荒れざらましを

「坐しせば」は、「坐せば」を延べて言うてゐるのであるが、「し」と云ふ強めの詞がいかにも有力であるかを識るべきである。「荒れざらましを」は、荒れてゆく島の御門を、實際に目前に眺め、もしも皇子がこの世に在りましたならば、このやうには荒れることはあるまいと云ふ、強い感動を平易に詠嘆してゐるのである。

一七四 外に見し真弓の岡も君坐せば常つ御門と侍宿するかも

すなはち、日並皇子世に在します頃は、眞弓の岡とて、心もとめずにおたが、いまは君みま
かり給ひ眞弓の岡に在るをおもへば、そこを永久に變ることなく君の御殿としてお仕へする、
と云ふ意である。由豆流曰く、「とのゐは、居にて、夜殿に居るといふ事也。」云々。

眞弓の岡。檀乃岡とも訓む。大和國高市郡坂合村眞弓。

一七五 夢にだに見ざりしものを鬱悒く宮出もするか佐日の隈回を

夢にみたこともない、かうした悲しみに遭遇して、日の隈のほとりを、官所を出入しては往
來する状態を言うてゐるので、眞淵の云ふごとく、「まことの歌にてあはれとおぼゆれ」はその
通りである。「オボホシク」を、舊訓、「オボツカナ」であつたのを、契沖が「オボホシク」と訓
んだのである。「サヒノクマミヲ」の、「サ」は發語であつて、「檜隈」である。

檜隈。大和國高市郡。今坂合村であると云ふ。

一七六 天地と共に終へむと念ひつつ仕へまつりし情違ひぬ

「天地と共に終へむと」は、日嗣の皇子の御齡は、天地と共に永久不變であると云ふことを
表白しようとしてゐるのである。しかるに、忽然と皇子の御命は絶えたまうたが、悲しみに堪
へられぬ、と云ふ意である。眞淵は、「竟是盡すをいふ古言なり」と言うてゐるが、この歌の解
釋に當嵌めるには眞淵の言は細かすぎる。

一七七 朝日照る佐太の岡邊に群れつつ吾が哭く涙やむ時もなし

先づ、朝日照る宮、夕日照る宮、と云ふ光景を心に感じながらこの歌を味ふべきである。
「佐太の岡邊に群れわつつ」は、舍人等が、亡き皇子を偲び奉つて、心の寄りどころなく嘆き悲しんでゐる状態を言うてゐるのである。「群れわつつ」などの言ひ方は、鳥などが群れてゐるやうに聞えるが、これは、身分ひくき人達の心をよく擱んでその状態を巧に表現してゐるのである。

佐太の岡。大和國高市郡大字佐田。眞弓の西南に當る。

一七八 御立せし島を見るとき行潦ながるる涙とめぞかねつる

「御立爲之」は山田孝雄氏の主張する訓み方である。「ミタチセシ」は舊訓、「ミタクシシ」は眞淵の訓である。山田氏の訓み方が穩當であるのかも知れぬ。「行潦ながるる涙」は、雨の降つ

て流れる水のごとく、涙のとどまらぬそれを言うてゐるのである。契沖曰く、「雨によりて俄にまさる水の心なるべし」云々。皇子が、島の宮に常に在らせられた當時を偲び奉つてゐるのである。

一七九 橋の島の宮には飽かねかも佐田の岡邊に侍宿しに行く

「アカネカモ」は、舊訓、「アカズカモ」であつて、契沖は、「アカズカモは足らぬかもなり」と言うてゐる。守部は、「不飽鴨」あかねかもと言ひてあかねばかの意也。」と云うてゐる。橋の島の宮に仕へることのなにか心のもの足らず、佐田の岡邊に侍宿しに行く、と云ふ意である。

橋の島の宮。大和國高市郡。今の高市村大字橋の地。

佐田の岡。大和國高市郡越智岡村大字佐田の地。眞弓の西南。

一八〇 御立せし鳥をも家と住む鳥も荒びな行きそ年かはるまで

この歌の初句も、「ミクタシノ」がよい。島の宮の邊に、住む鳥よ、人に疎くなること勿れ、來年になるまで、と云ふ意である。

一八一 御立せし島の荒磯を今見れば生ひざりし草生ひにけるかも

「荒磯」と云ふのは、海に限らず、川でも池でも、このやうに言ふ場合がある。島の宮の池の汀に、今日の日來てみれば、皇子の在世の折は、手人れをして美しかった御庭も、いまは雑草が著く伸びてゐる、と云ふのである。「生ひざりし草」と云ふ表現には、作者の、深い歎きが

籠つてゐる。

一八二 鳥峙立て飼ひし鷹の兒巢立ちなば真弓の岡に飛び歸り來ね

「トグラタチ」と舊本に據るべきである。「鷹」は、「鷹」の誤りとする説もあるが、ここは、「カリ」でよいのである。御庭の鳥籠に飼ひおかれた鷹の子も、飛ぶことのかなふやうになつたならば、眞弓の岡に飛びきて、御陵を自分達と共に守れ、と云ふ意である。「飛び歸り來ね」と云ふ表現の内容には、皇子の、御葬の日に、鳥を養ふ風習などが行はれた、それが感じられる。

一八三 吾が御門千代常磐に榮えむと念ひてありし吾し悲しも

「吾が御門」は、日並皇子の住みたまうた宮所を言うてゐるのである。その宮所の永久に榮えることを常に思うてゐたが、皇子みまかりたまうた後は、つひにその望みも絶えて、われの心は悲しい、と云ふ意である。眞淵曰く、「かく事も無が如くして情深きは、心のまことより出れば也、」と感嘆してゐる。

一八四 東の瀧の御門に侍へど昨日も今日も召すこともなし

「東の瀧の御門」は東の方向にある、水の激ち流るる宮所のことである。その瀧の御門に仕へまつてをるが、皇子在しを召す御聲もきこえくるが、いまはその御聲も絶えて、悲みに沈んでゐる状態である。「昨日も今日も召すこともなし」と云ふ詞の中には、深い悲哀の情が籠つてゐる。

一八五 水傳ふ磯の浦回の石躑躅もく咲く道をまた見なむかも

「水傳ふ」は「磯」の枕詞であるが、ここでは、「磯」つまり、庭池の石間を流れては傳ひ落ちる、水邊の情景をよく寫し得てゐるのである。「もく」は茂くの意であつて、池のほとりの石の上に、つつじが茂く咲くころ、果して來つて見ることがあるであらうか、再び見たいと思ふが、見る時があるであらうか、と云ふ意である。或は、池の邊りに躑躅の花の盛りであるときを作者は歌つてゐるのであらうか。

一八六 一日には千遍參入りしひむかしの大き御門を入り難てぬかも

第四句は、「大寸御門乎」であるが、眞淵は、「今本たぎのと訓たれど、寸は假字也、假字の下

に辭を添るよしなし、」と云うて、「オホキミカドヲ」の訓に據つてゐる。ここは、「大き御門を」と訓んだ方が、結句の調子と相通するものがある。もしも、(一八四)の歌の、「瀧の御門」と同一のものとみるならば、歌柄のうへに力強きものを缺いてくるかも知れぬ。一日幾度となく伺候した島の宮に、いまは皇子在しませぬ故、その宮所に入るのも心進まぬと云ふ意である。この歌の場合の、「ひむかしの」と云ふ詞は、「大き御門」と云ふ表現に、重要な働きを示してゐる。(一八四)の歌の場合よりも、詞がこなれてきてゐるのである。

一八七 由縁もなき佐太の岡邊に反りぬば島の御階に誰か住まはむ

三句の、「反りぬば」の「反」は「君」の誤りであるとして、鹿持雅澄は、「反居者」と訓んでゐる。しかし、ここは、やはり「カヘリキバ」と訓んでおいた方がよい。佐太岡には、みまかりたまふ皇子のおはするが、つれもなくあはれに思ひ奉る。と云ふので、島の宮から、佐

太の岡邊に公番交替して伺へる舍人等は、島の宮にかかる御橋に御在世のころ常立たせられた君のいまはおはしませぬ、今後、誰人がその島の宮に住まはれることであらうか。と嘆いてゐるのである。

一八八 旦覆日の入りぬれば御立せし島に下りゐて嘆きつるかも

「旦覆」に就いての契沖の解釋を引用しておく。曰く、「日は一日を渡りて暮てこそ入なるを、朝の程に雨雲などの立重りたらむに、雲隠ゆかんやうに、皇子の後は天つ日繼をも知召て御年久に天が下をも照し臨ませ給ふべき御身の纒に三十もたらせ給はで隠ませば初の二句はあるなり、云々。眞淵は、「アマグモリ」となし、守部は、「アサカヘル」、雅澄は、「アカネサス」と訓んでゐる、これ等の訓み方のうちで、雅澄の、「アカネサス」は二句の「ヒノイリヌレバ」と云ふ句と照應するものがあつて、大體自然に受入れられるのである。けれども、契沖のやうな解釋

によつて味へば、「アカネサス」と云ふ句法の常識的であることは免れ得まい。皇子の、かつては池の島に立たれて在しました、その御姿なども偲び奉り、舍人であるわれは、池の島に來たつて嘆き悲しむ。と云ふ意である。

一八九 あさ日照る島の御門におぼほしく人音もせねばまうらがなし
も

皇子の在しなさぬ島の宮所に、朝の日は照り輝いてゐるが、參入する人々も見えず、森閑として、もの寂しい光景である。この「あさ日照る」は、印象的に鑑賞すべきであつて、冠辭程度に味うてはならぬ。「おぼほしく」は、ぼんやり、とか、晴れがたいとか、おぼつかない、等の意味が含まれてゐるが、作者の憂鬱感が、かうした形容詞によつて、いかに適確に表明されてゐることか、ふかく味はふべきである。

一九〇 眞木柱太き心は有りしかどこの吾が心しづめかねつも

「眞木柱」は檜の柱、すなはち太きと云ふ爲の枕詞であつて、大丈夫の心は常にあると自ら信じてゐたが、皇子のみまかりたまふ時に際して、自らの心の悲しみを鎮めかねると云ふ、悲嘆にくれる状態を言つてゐるのである。

一九一 毛衣を春冬片設けて幸しし宇陀の大野は思ほえむかも

「毛衣」については、種々説があるやうであるが、春の枕詞として解しておけばよい。「片設けて」は、春冬を待ちたまひては、と云ふ意に解するのがよいのかも知れぬ。「宇陀の大野」

は、大和國宇陀郡、阿騎野である。卷一の人麿作、(四九)「日並の皇子の尊の馬並めて御獵立たしし時は來向ふ」に據つて知られる阿騎野である。その阿騎野を慕ひ悲しむ、と云ふ意である。

一九二朝日照る佐太の岡べに鳴く鳥の夜鳴かはらふこの年ごろを

「この年ごろを」を、眞淵は、「去年の四月より今年の四月まで、一周の間御陵づかへすれば、年ごろといへり、」と云うてゐる。舍人等が朝夕皇子のみまかり給ふを嘆いてゐる心を、鳴く鳥に譬へたと解するむきもあるが、かういふところは、もつと現實的に味つておいてもよいのであらう。

一九三奴らが夜晝といはず行く路を吾はことごと宮道にぞする

右日本紀に曰く、三年己丑夏四月癸未朔乙未、薨じぬ。

賤き人々が夜晝となく往來する路を、われは悲みの心を抱いて、宮仕へする爲に、その人々と交りながら往反する、と云ふ意である。「コトゴト」を、舊訓は、「ワレハサナガラ」と訓んでゐるが、聲調の上から味へば、「コトゴト」がよいであらう。

柿本朝臣人麿、泊瀬部皇女忍坂部皇子に獻れる歌一首、并に短歌

一九四 飛ぶ鳥の 明日香の河の 上つ瀬に 生ふる玉藻は 下つ瀬
に 流れ觸らふ 玉藻なす か依りかく依り 靡かひし 嬌
の命の たたなづく 柔膚すらを 劔刀 身に副へ寐ねば
ぬばたまの 夜床も荒るらむ 一に云ふ 一に云ふ 玉垂の 慰めかね
て けだしくも 逢ふやと念ひて 一に云ふ 玉垂の 慰めかね

の大野の 朝露に 玉裳はひづち 夕霧に 衣は沾れて 草
枕 旅宿かもする 逢はぬ君ゆゑ

此長歌の端詞を、眞淵は、「此端詞は、古本また今本の左に、或本を引たるぞ正しければかくしるしつ、今本には柿本朝臣人麿献泊瀬部皇女、忍坂部皇子二歌とのみ有て、誰人を悲とも見えざる也、こは河島皇子の薨給へる時、其御妻泊瀬部皇女に献る歌にして、此皇女の御兄、忍坂部皇子に兼献るより有べき事なく、歌にもたゞ御夫婦の常の御有様をのみいひて、かの皇子の事はなし、仍て考るに、こゝは亂れて河島云云の十一字はおち、忍坂部皇子の五字は、次の明日香ノ皇女木施殯宮云云の端詞に有しが、こゝに入し物也、」と述べてゐる。讀者は、眞淵のこの説明に據つて泊瀬皇女と、忍坂部皇子と端詞に於ける關係を明らかに識る事ができるのであるが、果してその如く、忍坂部皇子の五字が、(一九六)の長歌の端詞に入る事に肯定なし得るであらうか。さてこの歌の構想であるが、在來の解釋に據れば、「嬬の命」つまり河島皇子と相寄り添ひて寝たまうた泊瀬皇女は、いまは身に添ふ夫の命も無き故に、夜床も疎くあらむ

と、皇女の心情と、その御様子を偲び奉つて、さて、その御心情の獨り慰め難い思召しのゆゑか、遠智の大野、つまり河島皇子をはふり奉る野に、まとふ衣も朝露に、夕霧に濡れて、君にお逢ひ申すかと思はれて旅宿をするのであるが、身まかりたまふ君にいまは逢はれぬ、と云ふ意である。しかるに、いささか問題とすべき點は、「君の命」である。舊本は、「イモノミコト」と訓んでゐるのであるが、ここの詞の前後の關係は、どうしても、「イモノミコト」としての感じであつて、決して、河島皇子のことを言うてゐるのでなくて、人麿が想像した、皇女その人である。そこで、「夜床」であるが、守部は、「靈床などの荒れたるを云ふにはあらず。」と云うて、夜の臥所である事に疑ひを夾んでゐない。これは在來の一般の解釋である。しかしこは、河島皇子を想像し給ふ泊瀬皇女のお心を人麿が歌ふのであるから、薨じたまうた皇子の御心情を、「嬬の命のたたなづく柔膚すらを劍刀身に副へ寝ねばぬばたまの夜床も荒るらむ」と云うて、泊瀬皇女の偲び奉る、つまり河島皇子のみまかりたまうた夜の床である。そこで「夜床」は皇女の夜の臥所でなくて、靈床説に近寄るものがありはしまいか。「たたなづく柔膚云々」は、決して皇子のことを申上げてゐるのではない故、明らかに、「イモノミコト」と解するの

がよいのである。然し、人麿は「夜床も荒るらむ」と云ふ、直截な表現の上に、泊瀬皇女の獨身であらせられることをも含めて、その夜の臥所をも想像してゐるのである。そこで端詞の御二方の御名であるが、ここは卒直に、人麿が、御二方の御名をもつて獻つたと解しておけば無理があるまい。人麿が、もし御二人の御心を想像し奉つて歌はれたとすれば、「孀の命云々」の問題は、おのづから解決されるものがありはしまいか。

泊瀬皇女はつせのひめみこ。天武天皇の御子。忍坂部皇子の同母の御妹。河島皇子の御妃。河島皇子は、天武天皇の御子。

反歌一首

一九五 敷妙しきたへの袖交そでかへし君玉垂きみたまだれの越野をちのに過ぎぬまた亦も逢あはめやも

一に云ふをち野に過ぎぬ

右或本に曰く、河島皇子を越智野に葬りし時、泊瀬部皇女に獻りし歌なり。

日本紀に曰く、朱鳥五年辛卯秋九月己巳朔丁丑、淨大參皇子川島薨じぬ。

袖を交へて共に相寝た君の、いまは遠智野にかくりたまひてをらず、再び君を現世にあつては逢見ることのかなはぬ、と云ふ意である。悲哀の心を籠めて、泊瀬皇女が、河島皇子を葬り奉る遠智野に立たれて、亡き夫君を偲ばれる、その御動作を人麿一流の技法と、魄力をもつて表現してゐる、息の弾むを覺える歌調である。

遠智野とちの。大和國高市郡。今の越智岡新澤の二村の地であると云ふ。

明日香皇女あすかひめみこの木き礎いの殯宮ひなみやの時、柿本朝臣人麿かきもとあそひのの作れる歌一首并に短歌

一九六 飛ぶ鳥の 明日香の河の 上つ瀬に 石橋渡しし 一に云 下つ
 瀬に 打橋渡す 石橋に 一に云 生ひ靡ける 玉藻ぞ 絶ゆ
 れば生ふる 打橋に 生ひををれる 川藻ぞ 枯るれば生ゆ
 る 何しかも わが王の 立たせば 玉藻の ころ 臥せば
 川藻の 如く 靡かひし 宜しき君が 朝宮を 忘れ給ふや
 夕宮を 背き給ふや 現身と 思ひし時 春べは 花折りか
 ざし 秋立てば 黄葉かざし 敷妙の 袖たづさはり 鏡な
 す 見れども飽かに 望月の いやめづらしみ 思ほしし
 君と時 幸して 遊び給ひし 御食向ふ 城上の宮を 常
 宮と 定め給ひて あぢさはふ 目言も絶えぬ 然れかも 一
云ふ、そこ あやに悲しみ ぬえ鳥の 片戀づま 一に云ふ、 朝鳥の
をしも 通はす君が 夏草の 思ひ萎えて 夕星の か行
一に云ふ、 朝霧の

きかく行き大船の たゆたふ見れば 慰むる 情もあらず
 そこ故に 術知らまじや 音のみも 名のみも絶えず 天地
 の いや遠長く 偲び行かむ 名に懸せる 明日香河 萬
 代までに愛しきやし わが王の 形見かここを

明日香河の上つ瀬に石橋を渡し、下つ瀬には打橋を渡し、その石橋の傍らに生ひて靡く玉藻
 は、絶えても生え、打橋に生ふる川藻は、枯れても生ふる。皇女の立たせられる御姿は、玉藻
 のごとく、臥せられるお姿は川藻のごとく、心素直により添ひたまうた、その皇女の背の君の
 御在します朝宮、夕宮を、何故に忘れ背きなされたのであらうか。御在世の時は、背の君と、
 春は花を折つて挿し、秋は黄葉を挿し、袖ふれあひたまひて、飽くこともなく、望月のごとく
 に共に愛しみ思はれ、時々は幸された、城上の宮は、いまは常宮と定められ、目に見奉ること
 もなく、聲をいだして申上ぐる事もなくて絶えた。かくの如くであるから、ぬえ鳥の君を戀ふ
 るごとく悲しく、朝鳥のごとく通はす背の君は、夏草の萎えるごとく、行き行く歩みもたどた

どしく慰むる情も知らぬ。それ故に天地の悠久であるそれを偲ぶごとくに萬代までわが愛しき皇女の、そのみに負ふ明日香河を形見として偲び奉る、と云ふ意である。

「石橋」は、川の中に石を置いて橋となしたことを云ふのである。「打橋」は、橋をうつす、と解するむきもあるが、板などを川に懸け渡す程度に解しておけばよい。「何しかも」は、この長歌の構想を知るうへに重要な働きをなしてゐるので、つまり玉藻は枯れても又生えるのであるが、人命はさうはいかぬ、なぜなぜお亡くなりになつたのか、と云ふ詠嘆が含まれてゐるのである。「わが王」この詞は、明日香皇女であるとするのである。「玉藻のまころ」は、玉藻のごとくであつて、山田孝雄氏の説によつて落付いた詞である。「宜しき君が」は、明日香皇女の背の君、つまり忍坂部皇子である。「然れかも」は、やはりこの長歌の構想の上にあつての、重要な役割を果してゐる詠嘆であつて、以上そのやうなありさまであるから、と云ふ程度に解すればよい。「夕星」のは大白星である。空に移行することから、「か行きかく行き」の枕詞となつてゐるのである。

さてこの長歌を味ふには、四段の構想からなつてゐることは、大體千蔭の説によればよい。

つまり、「飛ぶ鳥の——枯るれば生ゆる」迄が一段。「何しかも——背き給ふや」で二段。「現身と——自言も絶えぬ」で三段、「然れかも——形見かここを」で四段となるのである。しかし、「何しかも——自言も絶えぬ」と連続するとみてもよいので、すると、第三段によつてこの歌は鑑賞すればよい。

明日香皇女は、天智天皇の皇女である。

木嶋の宮。城上の宮であつて、大和國北葛城郡に在る。

短歌二首

一九七 明日香川しがらみ渡し塞かませば流るる水も長閑にかあらまし
しどにかあらまし

明日香川もしがらみを渡して、水の流れを塞ぎとめたならば、水もそこにのどかに流れを止むるのであるが、明日香皇女の御命のとどめまゐらす事のできぬのは悲しい事である、と云ふ意である。「しがらみ」は云ふまでもないが「水柵」の事であつて、川に杭を打つて、橋に竹木を絡みつけ、流れを止むるものである。

一九八 明日香川明日だに 一に云 見むと念へやも 一に云ふ わが王
のみ名忘れせぬ 一に云ふ御名忘れえぬ

明日香皇女が薨じ給ひ、明日だにも見奉ることはあるまい、と云ふ情を、明日香川は今日見なくとも、明日は見ようとする情がある故にか、皇女の御名は忘れ難い、と云ふ意である。眞淵は、「ミムトオモヘカモ」に據つてゐる。

高市皇子尊の城上の殯宮の時柿本朝臣人麿の作れる歌一首并
に短歌

一九九 かけまくも ゆゆしきかも 一に云ふゆゆ 言はまくも あやに
畏き 明日香の 眞神の原に ひさかたの 天つ御門を か
しこくも 定めたまひて 神さぶと 磐隠ります やすみし
し 吾が王の きこしめす 背面の國の 眞木立つ 不破山
越えて 高麗劔 和麿が原の 行宮に 天降り坐して 天の
下 治め給ひ 一に云ふ拂 食國を 定めたまふと 鳥が鳴く
吾妻の國の 御軍士を 召し給ひて ちはやぶる 人を和せ
と 従服はぬ 國を治めと 一に云ふ 皇子ながら 任せ給へ
ば 大御身に 太刀取り帯ばし 大御手に 弓取り持たし

御軍士を率ひたまひ 齊ふる 鼓の音は 雷の聲と聞く
まで 吹き響る 小角の音も 敵見たる 虎が吼ゆ
ると 諸人の おびゆるまでに 捧げたる 幡の
靡は 冬ごもり 春さり来れば 野ごとに 著きてある火の
一に云ふ冬ごも 風の共 靡くがごとく 取り持たる 弓弭の
騷み雪降る 冬の林に 飄風かも い巻き渡ると
思ふまで 聞の恐く 引き放つ 箭の繁けく
大雪の 亂れて来たれ 一に云ふ来れば 従服はず 立ち向ひし
も 露霜の 消なば消ぬべく 去く鳥の 競ふ間に 朝霜の消
現見と争ふはしに 渡會の 齋宮ゆ 神風に い吹き惑はし 天
雲を 日の目も見せず 常闇に 覆ひ給ひて 定めてし 瑞
穂の國を 神ながら 太敷き坐して やすみしし 吾大王の

天の下 申し給へば 萬代に 然しもあらむと 一に云ふかく
木綿花の 榮ゆる時に わが大王 皇子の御門を 一に云ふ皇子
の御神宮に 装ひまつりて つかはしし 御門の人も 白妙
の 麻衣著 埴安の 御門の原に あかねさす 日のことご
と 鹿じもの い匍ひ伏しつ つ ぬばたまの 夕に至れば
大殿を ふり放け見つつ 鶉なす い匍ひもとほり 侍へど
侍ひ得ねば 春鳥の さまよひぬれば 嘆も いまだ過ぎぬ
に 憶も いまだ盡きねば 言喧ぐ 百濟の原ゆ 神葬り 葬
りいまして 麻裳よし 城上の宮を 常宮と 定めまつりて
神ながら 鎮りましぬ 然れども わが大王の 萬代と思ほ
しめして 作らしし 香具山の宮 萬代に 過ぎむと思へや
天の如 ふり放け見つつ 玉禰 かけて偲ばむ 恐かれども

この長歌の内容を簡単に分析してみるならば、「神さぶと磐隠りますやすみしし吾が王の」は天武天皇が、大友皇子の亂を鎮められて明日香の眞神の原に皇居を定められ、そこに在らせられて崩御あそばされたことを云ふのである。その天武天皇の天下を治められた時のありさまは、「背面の國の眞木立つ不破山越え云々。國を治めと皇子ながら任せ給へば云々。」つまり天皇が皇子である高市皇子に、「吾妻の國の御軍士を」召し給はれて統率の任を授けられたことを言うてゐるのである。そこで高市皇子の「大御身に太刀取り帶ばし大御手に弓取り持たし云々。」の戰の狀態を述べてゐるのである。「常闇に覆ひ給ひて定めてし瑞穂の國を」は皇子が天下を統治されたことを述べてゐるのである。「榮ゆる時にわが大王皇子の御門を神宮に装ひまつりて云々」は高市皇子が突然に薨去あそばされた時の狀態を叙してゐるのである。そこで「城上の宮々」は常宮と定めまつりて「云々となるのである。「然れどもわが大王の萬代と思ほしめして作らしし香具山の宮云々。」は、萬代までも絶ゆることはあるまい。香具山の宮を天を仰ぐごとく、偲び奉らう、恐こき極みではあるが、と云ふ意なのである。つまり皇子の薨去は、持統天皇の

十年である。全篇にわたる構想の雄大と、人麿の奔放自在の技法は、まさに古今に絶するの觀がある。契沖曰く、「人麿の獨歩の英才を以て皇子の大功を述べて薨去を奉働らるれば、誠に不朽を日月に懸たる歌なり、」云々。「背面の國の」は美濃國であると云ふ。

眞神の原。大和國高市郡。飛鳥の法興寺の地。不破山。美濃國に在る山であらう。和野が原。美濃國不破郡。百濟の原。大和國北葛城郡。城上の宮。大和國北葛城郡。香具山の宮。大和國高市郡。高市皇子の宮である。

短歌二首

二〇〇 ひさかたの天知らしぬる君ゆるに日月も知らに戀ひわたるか
も

「アメンラツヌル」は、舊訓「アメンシラルル」とあるが、「天所知流」であるから舊訓にも無理がない譯である。つまり皇子の薨去あそばされて、天に上り給ふその心持を歌ひあげてゐるのであつて、その君故に月日の過ぐるのも知らず戀しく思ふ、と云ふ意である。

二〇一はたやすの池の堤の隠沼の行方を知らに舍人は惑ふ

「隠沼」と云ふ語感の中に人の心が表徴されてゐるとみて解すべきで、一首全體の上から味へば、意味がはつきりしてをらぬところもある。つまり、高市皇子のみまかり給うたその悲しみを、先づ念頭において、そこに舍人の心に通ふものを看取すればよいのである。「埴安の池」は云ふまでもなく、大和國香具山の邊に存在した池である。上句は、「行方を知らに」と云ふ序詞である。

或書の反歌一首

二〇二 哭澤の神社に神酒すゑ禱ひ祈めどわが王は高日知らしぬ

右の一首、類聚歌林に曰く、檜隈女王泣澤神社を怨む歌なり。日本紀を案ずるに曰く、十年丙申秋七月辛丑朔庚戌、後の皇子尊薨じぬ。

「哭澤の神社」は古事記の文によれば、伊邪那美ノ神の神避られた時、伊邪那岐ノ命、嘆き給はれて、「哭きたまふ時に、御涙に成りませる神は、香山の畝尾の木のもとにます、名は泣澤女ノ神云々」の文章によつて明らかである。「神酒すゑ」は眞淵は、「三輪は借字にて、酒を醸る態をいふ」と言うて、神酒ではないとしてゐるが、神酒として味うても無理でないと思ふ。「高日知らしぬ」は、天に神去りたまうた事をいふのである。

但馬皇女薨じ給ひし後穗積皇子、冬の日雪落るに、遙に御墓を望

み、悲傷流涕して御作歌一首

二〇三 零る雪はあはにな降りそ吉隠の猪養の岡の塞なさまくに

「あはにな降りそ」は、深く降ることなかれ、と云ふ意であつて、本文は、「安幡爾勿落」である。眞淵は、「安」は「佐」の誤りであるとして、「サハニナフリソ」であると言つてゐる。「塞なさまくに」は、眞淵は、「セキナラマクニ」であるとし、守部は、「塞」は「寒」の誤りであるとして、「サムカラマクニ」であると解してゐる。いづれも理の通つた訓み方である。しかし、ここは、鹿持雅澄の訓み方が明快である故、「塞なさまくに」がよいであらう。すなはち、雪が深く降り積つたならば、吉隠の猪養の岡に塞をなして、道も行き難くなる故、と云ふ意である。「塞」は「關」と同じい。

但馬皇女は、天武天皇の皇女であつて、御母は氷上娘であると云ふ。穗積皇子は、天武天皇の皇子、すなはち但馬皇女とは異母の兄妹であらせられる。

吉隠。大和國磯城郡、今初瀬村に屬す。

猪養。吉隠村の上方に在り。

弓削皇子薨じ給ひし時置始東人の歌一首并に短歌

二〇四 やすみしし わが王 高光る 日の皇子 ひさかたの 天つ
宮に 神ながら 神と坐せば 其をしも あやにかしこみ
晝はも 日の盡 夜はも 夜のことごと 臥し居嘆けど 飽
き足らぬかも

「わが王」は弓削皇子を申上げてゐるのである。「天つ宮に」は、「御墓所」とまで限定して解してはいけぬ。神魂の天に止まりたまふそれを想像しての天つ宮所なのである。雅澄は、高天ノ原であると言つてゐるが、そこまでやはり限定して解すると歌と言ふものは面白くない

るのである。「晝はも日の盡夜はも夜のことごと」は晝も夜も、深く悲しむ心の連続する状態を言うてゐるのである。「日之盡」を、「ヒノコトゾト」「ヒノツキ」「ヒノクルルマデ」などの訓み方があるが、そのやうにも味へるのである。

眞淵曰く、「これは古言をもていひつづけしのみにして、我歌なるべきことも見えず、そのつゞけに言を略きたるところは皆ことたらはずして拙し、此撰みたる巻に入るべきにあらず」云々。眞淵の説には大體賛成である。つまり人麿のやうな歌の技法の冴えが見うけられぬために、歌の特色を失つてゐるのである。長歌の中に盛らるべき内容としては、貧弱なのであつて、短歌の形式の中に充分これだけの内容は生きる譯である。

弓削皇子は、天武天皇の皇子である。續日本紀に、文武天皇三年七月に薨りたまふ事を記してある。置始東人は、卷一の(六六)の歌の作者であると云ふ、傳記詳かならず。

反歌一首

二〇五 王は神にしませば天雲の五百重が下に隠りたまひぬ

卷三の、人麿の歌一首を引用しておく。卷三(二三五)の「皇は神にしませば天雲の雷の上に慮するかも」である。構想が同じであるが、「天雲の五百重が下に隠りたまひぬ」は雲の重なる感じを云ひ、悲しみの情を深く籠らしてゐるのであるが、重厚な響があると思ふ。崇高な調であると共に人心の行き着くところを示してゐる。形式の上にも成功してゐる歌である。長歌より數等重要な響を傳へてゐる。

又短歌一首

二〇六 ささなみの志賀さざれ波しくしくに常にと君が念ほえたりける

「念ほえたりける」は契沖に據るところの訓み方であるが、舊訓は「オボシタリケル」である。本居宣長は、「オモホセリケル」と訓んでゐる。契沖の訓がよく、その解釋は要を得てゐると思ふ。契沖は「しき浪の如く常にましまして久しく仕へ奉らむと思ひし事のはかなくなりけるよと東人がみづからの心を述べたるなり、」と云うてゐる。「しくしく」は、重浪とある如く、立ち重つて寄る波の状態を言うてゐるので、その感じを取入れてゐるのである。「又短歌一首」と云ふ端辭は、前の長歌の反歌でない事を示す、と云ふ問題があるが、とにかく、弓削皇子の薨ぜられた時の作であることは事實とみて差支へない。作者も、置始東人とすべきである。

柿本朝臣人麿妻死せし後泣血哀慟して作れる歌二首并に短歌

二〇七 天飛ぶや 輕の路は 吾妹子が 里にしあれば ねもころに見まく欲しけど 止まず行かば 人目を多み 數多く行かば

人知りぬべみ 狭根葛 後も逢はむと 大船の 思ひ憑みて
 玉かざる 磐垣淵の 隠りのみ 戀ひつつあるに 渡る日の
 暮れ去るが如く 照る月の 雲隠る如く 奥つ藻の 靡きし妹は
 黄葉の 過ぎて去にきと 玉梓の 使の言へば 梓弓 聲に
 聞きて のみ聞きて 言はむ術 爲むすべ知らに 聲のみを
 聞きてあり得ねば 吾が戀ふる 千重の一重も 慰むる 情
 もありやと 吾妹子が 止まず出で見し 輕の市に 吾が立
 ち聞けば 玉禳 畝火の山に 喧く鳥の 音も聞えず 玉梓
 の 道行く人も 一人だに 似てし行かねば すべてをなみ
 妹が名喚びて 袖ぞ振りつる 或本名のみ聞きてあり得

輕の路は吾妻の故里であるから、いつくしみの餘り、妻を見に行かうとして、通うて行けば、

人の噂さにとかくのぼること故、まあ後日行つて逢はうと楽しみにして、秘かに思ひを籠めてわたのに、日の暮れゆく如く、月の雲に隠るる如く、共に親しみあつた妻はみまかつたと云ふ、その便りを人傳にきいて、いまさらに妻を戀ふる心の術もなく、その死を人の噂さのみに聞いてゐるのもどかしく、妻の住み馴れた輕の市に亡き妻の面影なり、又はその聲のきこゆる思ひをして、偲ばうと來つてイんでゐるが、畝火山に鳴く鳥の聲もきこえず、道を行く人中に妻に似た人も見えぬ故、いたし方もなくて妻が名を呼んで袖を振り嘆く、と云ふ意である。「玉かぎる磐垣淵の隠りのみ戀ひつつあるに」これだけの詞の内容に、悲傷やるせない人麿の心の深處を窺ひ識られるのである。「千重の一重も慰むる情ありやと」などの言ひ方にしても感傷のいかに重厚であるかを識られる。

輕の路。輕の市のことであつて市邑である。大和國高市郡久米村の東南に在る。つまり畝火山が附近に在る譯である。

短歌二首

二〇八 秋山の黄葉を茂み迷ひぬる妹を求めむ山道知らずも

一に云ふ、路知らずして

黄葉する山に、人麿はイんでゐるのであらう。そして嘆きながら、いまは亡き世の妻を眼前に思ひ浮べようとするが、妻を葬つた山道さへ知れぬ、と云ふ意である。「迷ひぬる」は、妹が黄葉の茂きに迷つて歸らぬと比喩的に解するむきもあり、人麿がまどふと云ふ解釋もある。岸本由豆流は、「妹たづねもとめん山路をしらざれば、秋山の黄葉のしげきにまどひつると、うちかへして心得べし」と言うてゐる。大體かう云ふ氣持の歌である。

二〇九 黄葉の落り去るなべに玉梓の使を見れば逢ひし日念ほゆ

妻の身まかつた知らせを受けた時はあたかも黄葉の散る時である。いま大和からの使を見る
と、妻とかつて逢つた日のことなどが偲ばれる、と云ふ意である。「玉梓」は種々説もあるが、
枕詞として解しておけばよい。萬葉集を幾度となく味ふうちに、かうした枕詞がおのづから理
窟なしに解明されてくるからである。

二〇現身と 念ひし時に 一に云ふうつ 取持ちて 吾が二人見し
趁出の 堤に立てる 槻の木 ちちごちの枝の 春の葉の
茂きが如く 念へりし 妹にはあれど 憑めりし 兒らには
あれど 世の中を 背きし得ねば かぎろひの 燃ゆる荒野
に 白妙の 天領巾隠り 鳥じもの 朝立ちいまして 入日
なす 隠りにしかば 吾妹子が 形見に置ける 若き兒の

乞ひ泣く毎に 取り與ふ 物し無ければ 男じもの 腋ばさ
み持ち 吾妹子と 二人吾が宿し 枕づく 嬌屋の内に 晝
はも うらさび暮し 夜はも 息づき明かし 嘆けども せ
むすべ知らに 戀ふれども 逢ふ因を無み 大鳥の 羽易の
山に 吾が戀ふる 妹は坐すと 人の言へば 石根さくみて
なづみ來し 吉くもぞなき 現身と 念ひし妹が 玉かぎる
ほのかにだにも 見えぬ思へば

「現身と念ひし時に」は妻が此世に在つた時にである。「取持ちて吾が二人見し」は、二人睦
じく相並んでと云ふぐらゐに解す。「趁出の堤に立てる槻の木」は家門からすぐ近くの堤ぐらゐ
に解す。つまり槻の木は春の葉の細かく茂るやうに心を交した妻であつたが、と云ふ意。「見ら
にはあれど」は妻のことを愛しんで言うてゐるのである。「世の中を背きし得ねば」は人の死の
背くことのできぬ、と云ふ意である。「かぎろひの燃ゆる荒野に白妙の天領巾隠り」は、葬送の

光景を叙してゐるのである。かくて人麿は、妻が形見として残し置いた子の泣き叫ぶさまを叙して、妻を失つた男一人の困窮の極みを嘆いてゐるのである。自分と二人で相寢たことのある孀屋は、晝間さへ寂しくてならず、まして夜は息づき明かして、いかに戀しくても妻と逢ふことがかなはぬ。そこで羽易山に行つたならば、亡妻のゐるといふ人言を信じて、山深く石根を踏んで来たが、よいこともなくて、生きてゐるやうに思はれる妻も、ほのかにも見えて来ぬ、と云ふ意である。

悲痛なる事實の中に浸つて、よく、その背景に動く自然の要核を捉へ、人生の寂寥を歌ひ上げてゐる。「若きこの乞ひ泣く毎に云々」の内容は、人麿に子どもが在つた確證を得られる譯であつて、興味ある事實なのである。

羽易山。大和國添上郡春日に在つた地名。

短歌二首

二一 去年見てし秋の月夜は照らせれど相見し妹はいや年さかる

いま月は照り渡つてゐる、この月は、前年の秋に亡妻と眺めたことのある月である。思へば久しく年の経た感じがする、と云ふ意である、感じが逼迫してゐるが、句法がのびやかに通つてゐる。

二二 衾道を引手の山に妹を置きて山路を行けば生けりともなし

「衾道」は枕詞である。「引手の山」は羽易山の一名かも知れぬ。つまり妻を引手の山に葬送して、自分は山路を歸り來つたが、悲しみの餘り生きた心地もせぬと解すべきか。

或本の歌に曰く

二三 現身うつせみと 念おもひし時とき 手携てたづまへ 吾わが二人見みし 出いで立ちの 百もも
 枝槻えつきの木き ちちごちに 枝えださせる如ごと 春はるの葉はの 茂しげきが如ごと
 念おもへりし 妹いもにはあれど 恃たもめりし 妹いもにはあれど 世よの中なか
 を 背そむきし得えねば かぎろひの 燃もゆる 荒野あらのに 白栲しろたへの 天あま
 領巾ひれ隠かくり 鳥とりじもの 朝あさ立ちい 行ゆきて 入いりなす 隠かくりにし
 かば 吾わ妹子もこが 形かた見みに置おける 緑みどり兒ごの 乞こひ 哭なく 毎ごとに 取と
 り委まかす 物ものしなれば 男をとこじもの 腋わき挿はみ 持もち 吾わ妹子もこと
 二人吾ふたりわが宿ねし 枕まくらづく 婦屋つまやの内うちに 晝ひるは うらさび暮くし
 夜よるは 息衝いきづき 明あかし 嘆なげけども せむ 術すべ知しらに 戀こふれども
 逢あふ縁ゆかりを無なみ 大鳥おほとりの 羽易はびの山やまに 汝なが戀こふる 妹いもは坐います

と 人ひとの云いへば 石根いはねさくみて なづみ來こし 好よくもぞ無なき
 現身うつせみと 念おもひし妹いもが 灰はいにて坐いませば

この長歌は、前の長歌と内容は同一であるが、幾分句法が變つてゐる。それは、「現身うつせみと念おもひし妹いもが玉かぎるほのかにだにも見えぬ思へば」が、「現身うつせみと念おもひし妹いもが灰はいにて坐いませば」となつてゐるのである。ここで、「灰はいにて坐いませば」と云ふ、火葬を事實とすれば、「白栲しろたへの天領巾あまひれのたね隠かくり」は煙りではないかと云ふ憶測も生ずるのである。雲である説がある以上、この説も面白いのではあるまいか。雅澄は、「仄ひそ」を灰はいに誤れるより亂みだれたるものか、と云うてゐる。「灰而座者」と云ふ本文を右の如く推測した譯である。

短歌三首

二四 去年こぞ見みてし秋あきの月夜つきよは渡わたれども相見あひみし妹いもはいや年としさかる

前出の(二二一)の歌と同一であつて、ただ三句の、「ワタレドモ」が相違してゐるのみである。前出の端辭には、「短歌二首」とあるが、右の端辭は「短歌三首」とあつて、最後の一首は別の歌を載せてある。

二一五 衾路を引出の山に妹を置きて山路念ふに生けりともなし

この歌にあつては、四句の「ヤマチオモフニ」と云ふ句の相違である。

二一六 家に来て吾屋を見れば玉床の外に向きけり妹が木枕

妻の葬送をすませて、吾家に来てみると、妻が常に起伏す床は靈床と變り、木枕さへ向き變へて置かれて在つた、と云ふ意である。「ホカニムキケリ」は、舊訓「ホカニムキケル」である。他に、「ヨソニムキケリ」「トニムカヒケリ」などの訓み方もあるが、かう云ふところは、餘り訓み方にこだはらずに、死んで臥やつてゐた床と云ふそれを深く想像して味へばよいのである。眞淵曰く、「古へは人死て一周の間、むかしの夜床に手をだにふれず、いみつゝしめる例なれば、此の靈床は又の秋までかくてある也けり、」云々。

吉備津采女死せし時柿本朝臣人麿の作れる歌一首并に短歌

二一七 秋山のしたぶる妹なよ竹のとをよる子らはいかさま
に念ひ居れか 栲繩の長き命を露こそは 朝に置きて
夕は消ゆと言へ 霧こそは 夕に立ちて 朝は失すと言
へ 梓弓 音聞く吾も 髻髻見し 事悔しきを 敷妙の手

枕纏まくらまきて 劔刀つるぎたち 身に副そへ寐ねけむ 若草わかぐさの その夫つまの子こは
不さ恰ぶしみか 念おもひて寐ねらむ 悔くしみか 念おもひ戀こふらむ 時ときな
らず 過すぎにし子こらか 朝露あさつゆの如ごと也 夕霧ゆふぎりの如ごと也

「秋山のしたぶる妹」は、秋山の黄葉のほふが如き女と云ふ意であつて、その美はしいなよなよとした女子が、いかなる故に、長い命をこの世から去つたのであらう。朝露は朝に置いて夕べには消え、夕霧は夕べに立つて朝は失せるとは言へ、その女子をそつと眺めただけの吾さへ後に悔しくおもふのに、ましてや女子の手枕をして添寝をした、夫君は、いねるにもいねやらず心悔しく思ひ惱みゐるであらう。人としての壽命を全うせず亡くなつた女子が、「朝露の如也夕霧の如也」と云ふ意である。

「栲繩たくなはの長き命を」と言つて、女子の亡くなつたことを言はずに、朝露、夕霧、と叙すあたりは實に巧妙である。後句に至つて、「時ならず過ぎにし子らか」と反撥的に歌つたところは人麿一流の手法である。長歌の對句連續の方法の如何に飛躍的であるかを學ぶべきである。

吉備津采女きびつのおねに就いては、反歌の(二二八)の「志我津しかつの子らか」と云ふところから、本居宣長は、吉備津采女は、志我津采女の誤りであるとしてゐる。橘守部は、「志我津采女死せし時」と題辭を改めてゐるのである。この問題に就いては、山田孝雄氏は、「萬葉集講義」の中に面白い判断を下してゐる。参考すべきである。さて吉備津采女はどこまでも吉備津采女であつてよいので、志我津采女となつたところで歌の價値にさしはりは無い。

短歌二首

二二八 樂浪さきなみの志我津しかつの子らこが 我津いかづの子こが 罷道まかちの川瀬かはせの道みちは見みればさ
ぶしも

「志我津の子」と、「吉備津采女」と云ふ問題がここに生ずるのであるが、「志我津の子ら」と言うてゐるのは人麿の聲なので、「吉備津采女云々」の題辭は、單に題辭なるが故に、そこに

大きい相違があればあると云はれるのであるが、滋賀でみまかつた女子を、「樂浪の志我津の子ら」と歌にした人麿の製作態度を考へてみねばなるまい。吉備津采女であるが故に、必ずしも、吉備津采女であると歌は詠む可きであると云ふ法則は無い譯である。契沖は、「川瀬の道は身を投げむとて行くを云なるべし」と言うてゐるが、この説は大體よい氣がする。川を死出の旅としてみまかつた志我津の子、と云ふ意となるのである。

二一九 天數ふ大津の子が逢ひし日におほに見しかば今ぞ悔しき

「天數」を、雅澄は、「サザナミノ」であるとし、契沖は、「アメノカズ」と訓んでゐる。「オホ」と云ふ爲の枕詞である。大津の子、つまり美はしい采女と逢つたことがあるが、おほよそに見たに過ぎなく、いま身まかつたことを聞いて、おほよそに逢つたことを後悔してゐる意である。契沖は二句を、「オフシツノコカ」と訓んで、「オフシとはおよその心なり」と言うてゐる。

る。

讃岐狭岑島に石中の死人を視て、柿本朝臣人麿の作れる歌一首
并に短歌

二二〇 玉藻よし 讃岐の國は 國柄か 見れども飽かぬ 神柄か
ここに貴き 天地 日月とともに 満りゆかむ 神の御面と
繼ぎ來る 中の水門ゆ 船浮けて 吾が榜ぎ來れば 時つ風
雲居に吹くに 奥見れば 跡位浪立ち 邊見れば 白浪とよ
む 鯨魚取り 海を恐み 行く船の 楫引き折りて 彼此の
島は多けど 名ぐはし 狭岑の島の 荒磯面に 盧りて見れ
ば 浪の音の 繁き濱邊を 敷妙の 枕にして 荒床に よ
り臥す君が 家知らば 行きても告げむ 妻知らば 來も問

はましを 玉梓の 道だに知らず 鬱悒く 待ちか戀ふらむ
愛しき妻らは

讃岐の國はうるはしく見るに飽かない。天地の日月とともに圓滿にあるであらうこの國は、つまり神の生みたまうた國である。その國を歩みつづけて、中の水門から船出してきたが、折から雲居に風は吹いて、沖には重なり合ふ浪の立つのが見え、磯へには白浪がとどろいてゐる。海を恐しくおもつて、船の楫をうごかしてくるに、島はあたりに多く、その島の中の狹峯の島に船をとどめて假慮を作り、浪の音の烈しい濱邊に下り立つたところ、その濱邊に旅人の死に横たはるを見た。旅人の家を知つてゐるならば行つて知らしてやりたいが、この光景を妻が知つたならば驚いて訪ねてくるであらうが、自分の夫の行つた道さへ知らずに夫君のかへるのを待ちこがれてゐるであらう愛しき妻は、と云ふ意である。

綿々として盡きない人麿の情感が、大自然を極めて巧妙に捉へて、旅中途上の一事實を歌ひあげてゐる。容易に吾人は歌になし得ぬ現實なのであるが、自然現象の中に取り入るる人麿の手

腕は、不吉そのものを超えて、美しきものあらはれを示さうとしてゐる。

「神の御面と」は國を云ふのである。神名に、「面足命」とあるのは、参考するに足りる。神が國を生むと云ふそれによつて想像はつくのである。「繼ぎ來る」は、「ツキテクル」「ツキテコシ」等の訓み方がある。雅澄は、「次來」の上に「云」の字を脱したと解し、「イヒツゲル」と訓んでゐる。契沖は、「次テ來ル」とは斷ずつづきて來る意にて、中とつづけん爲にや」と言うてゐる。大體かう云ふ訓み方を念中に入れて味ふべきである。「中の水門ゆ」は、讃岐に那珂郡と云ふところがあるゆゑ、その湊ではあるまいかと云ふのが眞淵の説である。「楫引折りて」は、種々説もあるやうであるが、楫を浪間に入れる時、折れる感じのするものであるゆゑ、その形容程度に味へばよいと思ふ。

反歌二首

二二 妻もあらば探みてたげまし佐美の山野の上の宇波疑過ぎにけ

「探みてたげまし」は、「摘みあぐる」と解して、千蔭は、「死屍をとりあぐる事なり、クゲは髪タグなどのタグと同言なり。此死屍をウハギにたとへて、云々。」と云ひ、宣長の説に據らうとしてゐる。しかるに眞淵は、「ここも探て給させまし物をといふ古言なるを知り」と言つてゐる。可成りの見解の相違である。山田孝雄氏は、眞淵の説によつてゐるのであるが、つまり、死に臥る旅人の妻が居つたならば、宇波疑（よめな或ひは野菊であると云ふ）を摘んで食べさせたであらうが、と云ふ意とするので、そのウハギも山べをみればすでに時が過ぎて摘んで食ふべくもなくなつた、と嘆息してゐるのである。「ツミテタグマシ」は、舊訓「トリテキマシ」である。死屍を取り上ぐると云ふ説には賛成することはできぬが、死人の前にイむ人麿が、いまもしここにその妻が回向する心で來つたならば、ウハギでも供へて悲しむであらう、と云ふ意が籠つてゐると解しても差支へあるまい。

二二二 奥つ波來よる荒磯を敷妙の枕と纏きて寝せる君かも

沖から寄せてくる波が磯にとどろいてゐる。そこを枕として寝ねるごとくに死んでゐる君よ、と云ふ意である。「寝せる君かも」と死ぬことを言うてをらぬが、そこに深い悲しさがある。この歌は、幾分前の歌よりも劣るであらう。

柿本朝臣人麿石見國に在りて死に臨みし時自ら傷みて作れる
歌一首

二二三 鴨山の磐根し纏ける吾をかも知らにと妹が待ちつつあらむ

死に臨んだ時の歌としては、いかにも調子がおほどかである。人麿の張り切つた氣持が失せ

ぬ時の作であらう。「磐根し纏ける吾をかも」と言うても、必ずしも磐根を枕にして臥る意味ではないが、人麿ほどの歌人は、自然を相手にかう云ふ相撲が取れたのである。

柿本朝臣人麿死せし時妻依羅娘子の作れる歌二首

二四 今日今日と吾が待つ君は石川の貝に一に云交りて在りといはずやも

「貝に交りて」を、契沖は、「貝ニマジリテは鴨山の麓かけて川邊に葬れるこそ」と言うてゐる。山田孝雄氏は、「石川の峽といはむに差支あるまじ。」と言うてゐる。つまり貝に交るといふのは、遺骨をそこに想像せしめることになるのであるが、短歌本来の味ひ方から考ふれば、こは「石川の峽」であつて、貝は借字であるとする説に賛成するものである。「在りといはずやも」はこの世に在らぬとは言ひ難い、と云ふ意である。附言。「マジリテ」は山峽に入りて遊ぶ

と云ふ意である。「石川の峽に交りて在りといはずやも」である。

二五 直に逢ば逢ひがてましを石川に雲立ち渡れ見つつしぬ偲ばむ

一句、「タダノアヒハ」と云ふ訓もあるが、ここは、やはり「タダニアハバ」がよい。「アヒモカネテム」を、「アヒカツマシジ」と訓む説は、橋本進吉氏によつて決定されようとしてゐるので、井上通泰氏も橋本説によつてゐるやうだ。山田孝雄氏はそれに據らずに、「アヒモカネテム」と訓んでゐる。眞淵は、「アヒガテマシヲ」と訓んでゐる。眞淵の訓は調子の上に快く響くものがある。

人麿の身まかつた事を人言によつて知つたが直ちに行きて逢ひ難く、せめて石川に雲なりとも立ちのぼれ、それを見ながら夫君を偲ぼう、と云ふ意である。

丹比真人名闕く、柿本朝臣人麿の意に擬へて報ふる歌一首

二二六 荒浪に寄りくる玉を枕に置き吾ここにありと誰か告げなむ

眞淵は、題辭について「今本ここに報歌とあれど、報と云べき所にあらず、後人さかしらに加へし言と見ゆ、」と言うてゐる。守部は、「丹比真人名擬石中死人報柿本朝臣人麿作歌一首」と改めて、(二二〇)の長歌及び反歌の次ぎへ置くべき詞書であるとしてゐる。曰く、「擬石中死人」本には、擬柿本人麿之意報歌とあるは、字を多く落したる也。歌の意石中死人の人麿呂に報へたるなれば、右の如く端書を補ひて、原に復しつ。云々。つまり、死人が人麿に報へたと云ふのである。死人に代つて、丹比真人某が作つたとするのであるが賛成できぬ。この歌は、どこまでも人麿の死を悼み、人麿の心となつて作つたと、卒直に解しておけばよいのではあるまいか。そこで雅澄の解は左の如くである。「丹比氏が、人麿呂の意に擬て、娘子が直相者と云るに、こたへたる謂なり」と言うてゐる。雅澄の解釋によれば、依羅娘子の歌にこたへたとな

る譯である。恐らく雅澄の解釋が妥當であらう。

或本の歌に曰く

二二七 天離る夷の荒野に君を置きて念ひつつあれば生けりともなし

右の一首の歌、作者いまだ詳ならず。但、古本この歌を以てこの次に載す。

この歌も、眞淵の説をここに引用すれば、「此一首は其妻依羅娘子が意にあて、同じ丹比真人のよみたることとしるし故にかの古本をとれり、」と言うて、左の詞書を附してゐる。「擬柿本朝臣人麿妻之意作歌」云々。

「夷の荒野に君を置きて」は依羅娘子の心に擬へて人麿の磐根しまける、と云ふ心持を歌つてゐるのである。「生けりともなし」は、生きた心地がせぬ、と云ふことである。

寧樂宮

和銅四年歲次辛亥河邊の宮人、姫島の松原に、嬢子の屍を見て悲

嘆して作れる歌二首

二二八 妹が名は千代に流れむ、姫島の子松が末に蘊生すまでに

作者は深い感動を受けて歌ひ上げてゐるのであらうが、歌といふものの價值批判になると、相當問題が生ずる。「妹が名は千代に流れむ」と言うても、何か表現されてゐるものに空虚を感じる。後世まで妹の名が傳はると云ふことであるが、そこには作者だけの感動に止まつてゐるものがありはしまいか。

しかし、次の歌(二二九)によつてあるところまで光彩を添へるものがあるのは事實である。

二二九 難波瀉潮干なありそね沈みにし妹が光儀を見まく苦しも

「難波瀉」は「洲渚をいへり」と岸本由豆流は言うてゐる。潮が干ると溺れ死んだ妹の姿が見えるやうな心持がする故、潮干る勿れと言うてゐるので、海底に沈んだ女の屍があらはれるとまで解してはいけぬのである。

靈龜元年歲次乙卯秋九月志貴親王の薨じ給ひし時作れる歌一

首并に短歌

二三〇 梓弓手に取り持ちて 丈夫の得物矢手挿み 立ち向ふ
高圓山に 春野焼く 野火と見るまで 燎ゆる火を いか
と問へば 玉梓の道來る人の 泣く涙 霈霖に降れば 白

妙の衣濕ちて 立ち留り 吾に語らく 何しかも もとな
言へる 聞けば 哭のみし泣かゆ 語れば 心ぞ痛き 天皇
の 神の御子の 御駕の 手火の光ぞ 幾許照りたる

「高圓山に」と言ふ爲に、梓弓以下五句は修飾したのであつて、その高圓山の春野の枯草の焼けるのかと見る、あの燃ゆる火は、何んの火であらうかと道を來る人に問うたところ、その人は衣を涙に濡らして嘆いて曰く、それは心もとないおたづねである、お聞きになれば泣かるる事であらう、語るにも心苦しい、あの手火の光は、志貴親王の御葬送の松明のかがやきである、と云ふ意である。

つまりこの長歌の内容は、高圓山に燃ゆる火をみて、志貴親王の御葬送の松明の火であるその印象的の光景の中に、人の嘆きを挿入した極めて巧みな修飾がなされてゐるのである。志貴親王は種々問題となつてをるが、志貴皇子として解するに不自然さは無い。つまり天智天皇の皇子である。

高圓山。大和國添上郡春日山の南。

短歌二首

二三一 高圓の野邊の秋萩いたづらに咲きか散るらむ見る人無しに

「いたづらに咲きか散るらむ」と云ふ詞の内容には、親王を悲しみ奉る情が言外に籠つてゐるのであつて、「見る人無しに」は現世に亡き人を云つてゐるのである。

二三二 笠山野邊行く道は許多も繁り荒れたるか久にあらなくに

右の歌は笠朝臣金村の歌集に出づ。

親王を葬り奉るに往來した三笠山の野べの道は、雜草の繁く生ひ荒れたる事よ、いまだ月日の久しく經たざるに、と云ふ意である、三笠山は高圓山のほりにある山であつて、春日神社の後にある山である。「コキダクモ」は數の多いことを云ふ句法であるが、この場合は、甚しく、と云ふ意である。

或本の歌に曰く

二三三 高圓の野邊の秋萩な散りそね君が形見に見つつ偲ばむ

(二三一)の歌には言外に籠る情があるが、この歌には、詞がややさわがしく外に顯れすぎてゐる感がある。君が形見として眺めたい故、秋萩の花の早く散らずにあれ、と云ふ意なのであるが、價値は前の歌より數等下る。

二三四 三笠山野邊ゆ行く道許多も荒れにけるかも久にあらなくに

舊訓は第二句、「野邊從遊久道」である。(二三一)の歌の第四句「繁り荒れたるか」が、右の歌では、「荒れにけるかも」である。「或本の歌」は數等價値が下るのは言ふを俟たぬ。

萬葉集卷第二作者人名錄

磐姫皇后

仁德天皇の皇后。履仲、反正允恭三帝の御母。武内宿禰の孫女、葛城襲津彥の女。

日本書紀に、「三十五年夏六月、皇后磐之媛命筒城宮に薨りたまひぬ。三十七年冬十一月甲戌朔乙酉、皇后を那羅山に葬しまつる」

輕大郎女

衣通王である。允恭天皇の皇女。母は忍坂大中姫命。木梨輕太子の同母妹である。

天智天皇

(中大兄) 舒明天皇の第二皇子。母は寶皇后(皇極・齊明)天武天皇の同母兄。

近江大津宮に坐す。

鏡王女

藤原鎌足の妻。額田王の姉。日本書紀天武天皇紀十二年の條に、「秋七月丙戌朔己丑、天皇鏡姫王の家にして病を訊ひたまふ。庚寅、鏡王薨せぬ。」

内大臣 藤原 藤原鎌足。天智朝の内大臣。

久米禪師 禪師は俗名。天智朝の人。

石川郎女 同名異人あり。天智朝の人、久米禪師の妻。

大伴宿禰 安鷹と云ふ。天曆校本に、「大伴宿禰諱曰安麻呂也。難波朝右大臣大紫大伴長徳卿之第六子、平城朝任大納言兼大將軍薨也云々」

大伴安鷹の妻、大伴旅人の生母か。

巨勢郎女 (大海人皇子) 天智天皇の同母弟、皇太子にましました。大和飛鳥の淨原宮に即位す。

天武天皇 天武天皇の夫人、書紀、天武紀に曰く、「又夫人藤原大臣の女氷上娘、但馬皇女を生みたまふ。次に夫人氷上娘の弟五百重娘、新田部皇子を生みたまふ。」云々。つまり姉は氷上大刀自、妹は大原大刀自とするのである。つまり鎌足の女で、夫人が二人在つて、後者の大原大刀自とするのである。

藤原夫人 天武天皇の皇女、大津皇子の御同母姉。母は天智天皇の皇女太田。齊明紀に曰く、「七年春正月丁酉朔壬寅、御船西に征きて始めて海路に就く。甲辰、御船、大伯海に到る、時に太田姫皇女女を産む。仍りて是の女を名づけて大伯皇女と曰ふ。」大來皇女とも云ふ。大寶元年薨、年四十一。

大泊皇女 天武天皇の第三皇子。大伯皇女と同母弟。叛を謀つて朱鳥元年十月二日、譯語田の舎に死を賜うた。御年二十四。

石川郎女 久米禪師と贈答した人に非ずとする。天智朝の人。

日並皇子尊 天武天皇の皇子。草壁皇太子、御母は持統、文武天皇の父。書紀に天武天皇十年「草壁皇子尊を立てて皇太子と爲たまふ。因以て萬機を攝めしむ。」持統天皇三年薨じたまふ。年二十八。

弓削皇子 天武天皇の第六の皇子。母は、天智天皇の皇女大江。長皇子の同母弟。文武天皇三年七月薨去。

額田王 鏡王の女。大海人(天武天皇)の妃。十市皇女(弘文皇后)を生む。後に中大兄(天

額田王

鏡王の女。大海人(天武天皇)の妃。十市皇女(弘文皇后)を生む。後に中大兄(天

智天皇の妃となる。

但馬皇女 たぢまのみめみこ 天武天皇の皇女、御母は藤原鎌足の女氷上娘。穗積皇子は異母兄、和銅元年三品で薨去。

舍人皇子 とねりのみこ 天武天皇の第三皇子。舍人親王である。母は天智天皇の皇女新田部。養老四年知

太政官事となつて、天平七年、知太政官事を以て薨去。

舍人娘子 とねりのをとし 宮女。藤原朝の人。

三方沙彌 みかたのさみ 書紀の持統天皇六年に、「冬十月壬戌朔壬申、山田史御形に務廣肆を授く。前

に沙門と爲りて、新羅に學門ふひとなり。」とある。この人であるとするのである。

園臣生羽 そののおみいくは 藤原朝の人。「園」は氏「臣」は姓。

石川女郎 いしかはのいらつめ 同名異人あり。よろしく考ふべし。

大伴宿禰田主 おほとものすくねたぬし 「佐保大納言大伴卿之第二子、母を巨勢朝臣也と曰ふ。」大伴卿は安麿。母巨勢朝臣は巨勢郎女。

大伴宿禰宿奈麿 おほとものすくねすくなまろ 安麿の第三子。大伴旅人の庶弟。坂上郎女の夫。續日本紀參照。

長皇子 ながのみこ 天武天皇の皇子。母は天智天皇の皇女大江。靈龜元年薨。

柿本朝臣人麿 かきのもろあそみひとまろ 藤原朝の人。宮廷直隸歌人。晩年石見の地に歿す。

依羅娘子 よさみのをとしめ 人麿の妻。

有間皇子 ありまのみこ 孝徳天皇の皇子。母は阿倍倉梯麿の女小足媛。齊明天皇四年十一月十一日、謀反の嫌疑を被り、紀伊國藤白坂に於て死を賜はる。年十九。

長忌寸奥麿 ながのいみきおくまろ 意吉麿・意寸麿とも書く。藤原朝の人。

山上臣憶良 やまのうへのおみおくら 文武天皇の大寶元年遣唐少録で渡唐す。天平五年、年七十四大和で卒す。

倭姫大后 やまとひめのおほきさき 天智天皇の皇后、父は天智の異母兄古人大兄皇子。

舍人吉年 とねりのえとし 天智朝の人。

石川夫人 いしかはのおほととじ 天智天皇の夫人。蘇我山田石川麿の女姪娘か。姪娘は元明天皇の生母。持統天皇の生母遠智娘の妹。

高市皇子尊たけらのみことのみこと

天武天皇第一皇子。御母は胸形君德善の女尼子娘。十市皇女の異母弟。壬申の亂に大功あり。持統天皇十年七月薨去。

持統天皇ぢとう

天智天皇の第二の皇女。御母は蘇我倉山田石川麿の女越智娘あきのいらぬ。天武天皇の皇后。後即位、藤原宮に坐す。

穗積皇子ほづみのみこ

天武天皇の第五皇子。御母は、蘇我赤兄の女大麩娘オホヌ。但馬皇女は異母妹。靈龜元年に一品で薨去。

置始東人おきせめのあづまひと

藤原朝の人。

丹比真人たぢひのまひと

藤原朝の人。

河邊宮人かはべのみやひと

奈良朝の人。

笠朝臣金村かさのあそみかなむら

元正・聖武朝の宮廷直隸の歌人。

萬葉集鑑賞卷第二参考書目

萬葉集註釋(仙覺全集)

仙覺律師

萬葉集管見

下河邊長流

萬葉集代匠記

釋契沖

萬葉考

加茂真淵

冠辭考

加茂真淵

萬葉集略解

橋千蔭

萬葉集古義

鹿持雅澄

萬葉集攷證

岸本由豆流

萬葉集檜孺手

橋守部

萬葉集の鑑賞及び其批評

島木赤彦

萬葉集新考

井上通泰

萬葉集年表	土屋文明
萬葉集地理考	豊田八十代
萬葉集講義卷第二	山田孝雄
校本萬葉集	佐々木信綱
新訓萬葉集	佐々木信綱
上世歌人名辭彙(短歌講座所載)	屋敷頼雄

萬葉集鑑賞の手記 二

高田浪吉

曩に、「萬葉集鑑賞卷第一」を刊行して、世の批評と紹介を受けたことを感謝する。拙著の不備な點は、甚だ懸念するところであつて、忌憚なき世評をも甘んじてうける次第である。歌友の二三が、拙著を詳細に讀破せられ、誤りの多くを指摘して、且教授を賜つたのは感謝に堪へぬ。自らの學識不充分と、校正の粗漏を深く反省するところがあつた。或友は、参考書により多きを望まれるし、或友は、文意の對他的にならざる事を戒められた。深く御意見に感銘するものである。

萬葉集を鑑賞する参考書の一つとして、先づ挙げられるのは、雑誌「アララギ」に發表された「萬葉集短歌論講」である、これは、齋藤茂吉氏の「萬葉集短歌鈔」に次いで、アララギ第七卷(大正三年)第五號(六月)から、島木赤彦、古泉千櫻、齋藤茂吉、中村憲吉の諸氏によつて始められ今日に及んでゐるのである。(アララギ二十五周年紀念號参照)萬葉集に親む人々にと

つては、作歌者の築き上げた萬葉鑑賞の基本として、「萬葉集短歌論講」を認めることは一つの方法なのである。そこには、白熱化する萬葉集の精神に對ふ、作者達の努力の跡の歴然たるものが窺はれるからである。一方國文學者の大きい業績については、又深く考へなくてはならぬ。現代に於ける二三の良参考書については、他日述べる事にする。

「萬葉集短歌論講」の業績の一つとして、島木赤彦氏の「萬葉集の鑑賞及び其批評」の一書は、萬葉集鑑賞の視野をひろげた好著であつて、現代に於ける萬葉集研究の指針となるべきものである。或ひは、「萬葉集短歌論講」以前に於ける、伊藤左千夫氏の「萬葉集新釋」(左千夫歌論集参照)は、主として、「萬葉集古義」に據つて見解を述べてゐるのであるが、一首の歌に就いて、長文に互つて意を盡くしてゐるその鑑賞態度は、作歌者としての情熱と、萬葉の精神に合致しようとする迫力が、遺憾なく發揚されてゐる點において、参考に價する好著である。

萬葉集に親む人々にとつて、作歌に携はる人々にとつて、以上は簡單で意を盡くさざるところがあるかも知らぬが、現時、萬葉集研究の發展の根據が奈邊にあつたかを識るには、是非とも考へなくてはならぬ。重要な問題なのである。

本書の、長歌を鑑賞するに當つて、解釋の方法にいささか、在來の註釋書とは異るところを、讀者は感じられてゐると思ふ故、一言自分の持つ意見の一端を述べておかうと思ふ。萬葉集の長歌の相と云ふものは、大體に於いて、詞の運用方法が共通してゐると言うてもよく、對句などの運用などにも、部分々々から細かく考察してみるならば、修辭上の巧妙な變化は認められるのであるが、大觀的に考察してみるならば、やはり對句の運用は、一樣に同じやうな面白味とみて差支へないのである。懸詞なり、序詞などの運用などを考へるときにあつても、同じ意味のことが言へるのではあるまいか。そこで長歌の内容に立ち入つて、意味の解釋となるのであるが、一つの詞句の吟味と云ふよりも、懸詞などが、どのやうな一事實をめぐつて活動してゐるか、その表現形式をよく會得してかからねばならぬ。萬葉集の長歌なるものは、記紀などの歌の格調とは可成りの相違があるので、萬葉の歌には表現の上に、組織的のものが感じられるのであつて、表現の形式美を、先づ作者は考へてゐるやうである。これは萬葉集の長歌のすべてを指して言うてゐるのではないのであるが、少くとも萬葉集の短歌なり、長歌には、人々によつて、磨きをかけられた珠玉の如き光澤を持つてゐると云ふことは、否めない事實なのであら

う。記紀などの歌謡に比較してみるならば、おのづから理解さるる問題なのである。特に、長歌などに據つてそれを深く感じられるのである。そこで萬葉集の長歌を鑑賞する一つの方法として、長歌の持つ形式美の中から、作者の言はんとする一事實を剔抉する、そして、その上から懸詞なり、序詞の活用如何を見るべきではあるまいか。「巻第一」の長歌を鑑賞するに當つて、自分はそれを實行したつもりである。本書は、懸詞、序詞を單なる形式的技法、譬喩程度に考へず、より現實味を加へて味ふ方法をとりたいのである。場合によつては、意譯にとどめ、あるひは、その内容の分析にとどめることとした。一面解釋の簡明を期する爲には、このやうな方法も成立つのではあるまいかと思ふのである。

昭和九年三月十二日印刷
昭和九年三月十六日發行

萬葉集鑑賞 卷第二

定價壹圓貳拾錢

著者	高田浪吉
發行者	橋本福松 <small>東京市神田區駿河臺貳丁目拾番地</small>
印刷者	白井赫太郎 <small>東京市神田區錦町三丁目十七番地</small>
所有	

精興社印刷行

發行所

東京市神田區駿河臺
二丁目十番地

古今書院

振替東京三五三四〇番

終

